人間的労働の経済学的考察（三）

山本二三丸

はしがき
一　人間的労働の基本的意味……（以上、第十四巻第四号所載）
二　本来的私的所有のもとでの人間的労働
(1)　本来的私的所有の意味
(2)　社会的富の規定
(一)
(二)……（以上、第十五巻第三号所載）
(三)……（以上、本号所載）
(3)　商品生産における労働の二面性……（以下、次号所載予定）
(4)　私的労働の社会的性格
(5)　労働の対象化
(6)　価値法則

(7)　所有法則（交換の法則）
(8)　価値の自立化
(9)　発展法則
三　人間的労働力の商品化
四　資本制的私的所有のもとでの人間的労働
五　社会的所有のもとでの人間的労働

二　本来的私的所有のもとでの人間的労働

(2)　社会的富の規定

(三)

『資本論』第一巻第一章「商品」においてとりあげられている商品がその冒頭の文章――「資本制的生産様式」が支配的におこなわれる諸社会の富は、一つの「尨大な商品集聚」として現象し、個々の商品はかかる富の原基形態として現象する」――のうちの、「個々の商品」（die einzelne Ware）および「富の原基形態」（seine Elementarform）という言葉によってもあきらかなように、資本制的商品から「資本制的」という規定を捨象されたところの、抽象的な商品であり、たんに「使用価値と価値」との「二要因」から成っていてまだ「剰余価値」なる規定をもたないところの、単純な商品であるということは、エンゲルスの「第二巻への序言」をまつまでもなく、たんに「抽象的」（abstrakt）と「単純な」（einfach）という二つの言葉の論理的意味を正しく考察しただけでもあきらかにされると

ところである。

ところが、宇野弘蔵氏は、まず「抽象的」と「単純な」という、右の二つの言葉について、両者のあいだに独特な「区別立て」を与え、これによって『資本論』冒頭の商品は「抽象的な商品」であって「単純な商品」ではないということを、以下にみるような氏独特の論理的ならびに国語的操作をもちいて論証しようとしているのである。氏は、その主著『価値論』の「序論」で――さきに引用した箇所につづいて――つぎのように述べている。

「何れにしても『資本論』第一巻第一章の商品が所謂単純な商品であるか否かは、決して無用の詮議ではない。実に『資本論』の経済学の方法として極めて重要な意義があるのである。そしてそれは又実は商品経済の極めて重要な性質に基くものと云わざるをえないのである。」(前出、一五ページ)

われわれにとってもまた、『資本論』冒頭の商品が「単純な商品」か「抽象的な商品」かという宇野氏の議論を吟味することは、「決して無用の詮議ではない。」この種の議論は「実に宇野氏の経済学の方法として極めて重要な意義があるのである」。右につづいて、宇野氏は、まず、単純な商品経済の「社会」が存在しないということを述べ(〔引用第一〕)、つぎに「単純な商品」は「生産的基礎から遊離したもの」であると(〔引用第二〕)、最後に、資本主義社会の「抽象的な商品」の「独自性」を説明している(〔引用第三〕)ので、われわれは、以下順次に、これらの説明の全内容を仔細に吟味していくことにしよう。ただ、これからの吟味にさきだってここで一言注意しておかなければならないのは、さきに引用した箇所(『価値論』九―一二ページ)の中で展開されていた氏独特の論理的命題をしばしば想起して比較対照することがきわめて有効適切であるということ、および、以下の引用においては、「商品経済」という言葉の意味する内容がいかに変通自在なものであるかということをあらかじめ心得ておくことが便宜であると

いうことである。

〔引用第一〕

「商品経済に対して普通一般に考えられる観念から云えば、それは全社会の有らゆる人々が、それぞれ自己の労働によって生産したものを自己の私有物として交換に提供する社会ということになるであろう。勿論、交換に提供せられるという以上は、此等の人々の間に分業が行われて居て、互に自己の日常の欲望の極めて局限せられた一分野しか自己の労働によって充足せられないということが前提せられる。それと同時に此等の人々は互に独立の生産者として、その各々の商品を互に自由、平等の立場で交換するものとせられる。此処に自由競争の原理が認められるわけである。

商品形態自身も実際又斯かることを想定して居るといえるのであるが、しかも具体的に、歴史的に、斯かる社会は在在しないのである。それは社会の一部には、種々なる社会に存在し得るのであるし、又恐らく中世都市ではかなり安定的に斯かる関係が、それも中世的制約を受けつつ存続し得たとも云えないことはないであろうが、しかし何れにしても斯かる関係が一社会を支配的に規定するということはなかった。寧ろ商品経済が支配的に行われる社会は、資本主義社会として始めて現われるのであって斯かる独立の小生産者の社会としてではない。

商品経済が斯くの如くその形態規定から想定せられる社会としては存在しないということは、しかし資本家が出現したからそうなったのだ、貨幣が存在するからそうならざるを得ないのだ、というようなものでは断じてない。資本家の居ない商品経済の社会、貨幣のない商品経済というものは、単なる空想の産物に外ならない。商品と貨幣、商品と貨幣と資本との間には更に根本的な関係があるのである。実は、資本のない、商品と貨幣との商品経済自身が已に社会的には存在し得ないのである。それは部分的には、或いは一時的には存在し得るのであるが、全社会的には存在し得ない。貨幣流通は、必然的に資本の発生をもたらさざるを得ない。而もそれさえ社会全体に支配的に行われるには、資本家的生産方法として発展せざるを得ないのである。

勿論、市場の関係としては、商品関係は、原則として単純なる商品交換に想定せられるようなものを展開して居ると云える。例えば資本家から賃銀を受け取った労働者が、その賃銀として得た貨幣を以て資本家から生活資料を買入れる場合には、資本家は売手であって労働者は買手である。これは最早や資本家と労働者との関係ではない。反対に労働者は買手として資本家のお得意でさえあり得る。貨幣も資本家の手にあっては資本であるが、これを以て労働者を雇入れるときは、労働者に資本としての貨幣を渡すのではない。資本は常に資本家の手にあるわけであって、今まで貨幣の形であった資本が労働力の形であるに過ぎない。したがって此の場合でさえ資本家と労働者との関係は買手と売手との関係に過ぎない。それは労働者が資本家から生活資料を買う場合と買手、売手の立場が反対になるに過ぎないのである。市場に於ては資本家と労働者とでさえ売手、買手の関係を展開し乍ら而も資本家的生産方法が、此れを基礎にして展開せられ得る点に、資本主義が商品経済をその根本原則とする根拠があるのである。

しかし又個々の商品も之を商品経済の要素的商品と考える場合には、具体的に歴史的に認められる所謂単純なる商品とは、非常に異ったものを要請することになる。商品経済が一社会の根本的社会関係を規定するものとなる為めには、理論的には勿論のこと、具体的にも或る程度迄支配的に、有らゆる生産物が、歴史的、具体的に云えばその社会の成員の大部分の人々の生活資料そのものが、商品として買われて始めて個々の人々の使用に供せられるものにならなければならない。所謂単純なる商品経済は、その点で生活資料そのものはなお多かれ少かれ自家で生産せられ、消費せられ乍ら、その余剰が商品として販売せられるというような関係に立って居る。少くとも社会の圧倒的部分の人々がかかる状態にあって行われる商品経済と云えるであろう。したがって社会的に云えば己に単純なる商品そのものが一種の抽象的存在の如きものとなって居る。それだからこそ部分的にのみ成立し得るのである。

有らゆる生産物が商品となるということは、云い換えればその生産物の生産者自身が自己の生産物を直接には消費し得ないということにならなければならない。労働者のように自己の生産した生産物を商品として買わなければならないということになって、始めて商品経済は全面的に徹底的に行われて来る。市場関係だけを抽象して見れば、何れも商品経済には相違ないが、資本主義社会と資

本主義以前の社会とではその点は根本的に異って居る。所謂単純なる商品経済の社会ではしたがって、商品経済はその法則を一般社会的基礎に置いて実現して居るとは云えないのである。

かくして商品経済の理論としての経済学の分析に於いては如何に抽象的なる商品を扱うにしてもそれは已に資本主義社会の如く全面的に商品交換の行われて居ることを前提として居るものであって、之を所謂単純なる商品として具体的に歴史的に資本主義以前の商品となすことは出来ないのである」（前出、一五―一八ページ）。

さて、前稿においておこなったと同様に、この引用箇所についても、各パラグラフごとに、その論理的ならびに国語的性格のほどを検討してみよう。

まず、**第一パラグラフ**について。――「**商品経済に対して普通一般に考えられる観念から云えば、それは全社会の有らゆる人々が、それぞれ自己の労働によって生産したものを自己の私有物として交換に提供する社会ということになるであろう**。」この文章についてまず注目されるのは、論者が「商品経済」を「社会」すなわち「私的交換のおこなわれる社会」と同じものとしている点である。このように「商品経済」を「商品交換社会」と同一視することは、はたして正しいといえるであろうか？　それは、あきらかに誤りである。なぜならば「商品経済」とは、労働生産物を――商品として――私的に交換しあうことによって成り立つ経済のことであって、それは多数の生産者＝商品生産者を包含するものであり、これらの生産者相互の一定の関係を示すものにほかならない。それはけっして社会のことをいっているのではない。この「商品経済」と「商品交換社会」とのちがいは、ある特定の社会について、それがかってまったく商品交換のおこなわれなかった状態から、しだいに商品交換がおこなわれ商品経済の網の目の中に大多数の成員があみこまれ、最後にすべての成員がその労働生産物を商品として交換するようになるという、歴史的発展

過程を考えてみればあきらかである。これは、現物経済の支配していた社会の中に、商品経済が発生し、発展し、ついに、商品経済がその社会において支配的となるということである。すなわち、商品経済の支配する社会が「商品交換社会」であって、「商品経済」そのものと「商品交換社会」とは、このように全くちがったものである。このことは、「経済」と「社会」とが全くちがったものであることを考えてもおのづから明らかになるはずである。

ところで、この論者が右のように、「商品経済」と「社会」との誤った同一視を固執しているのはどういうことを意味するかといえば、それは、この論者が、「全社会のあらゆる人々がすべての労働生産物を交換に提供する社会」でなければ「商品経済」とはいえない、こういう「一〇〇パーセント商品交換社会」以外には「商品経済」はありえない、という『主張』を、これによって裏付けようとの意図をもっているからである。このことはつぎに考察する第二パラグラフ以下の中に盛られている主張をみれば、ただちに知られるところである。まずはじめに「商品経済」とは「一〇〇パーセント商品交換社会」のことだと『定義』しておき、ついで、だから「一〇〇パーセント商品交換社会」以外には「商品経済」はありえないのだと『主張』することは、まことに見えすいた論理的ペテンというのほかないが、しかし、このような論理的ペテンは、かえって論者自身の論理的ならびに国語的理解能力のほどを示しているばかりでなく、また当面とくに重大なことは、「商品経済」の歴史的発生と発展の過程についての完全な無知と無理解とを表白する典型的『主張』であることをみずから示している。なぜならば、このような考え方からすれば、ひとつの歴史的社会が、現物経済から商品経済へ漸次に発展＝移行するということはまったくありえず、「一〇〇パーセント現物経済社会」から「一〇〇パーセント商品交換社会」＝「商品経済」への瞬時にして突如たる変化しかありえないからである。

もしまた、「社会」という言葉を経済的な意味での「社会」と解して、各生産者が生産および交換において相互に関係しあい依存しあっている社会的一範囲全体をもって「社会」と呼ぶならば、右の論者のいっているような「商品経済は、商品交換社会のことだ」という『命題』は、完全なトウトロギーとなる。このばあいには、ひとつの歴史的社会もしくは歴史的な国家の中で、労働生産物の私的交換によってその存続を維持しているひとつの地方的範囲そのものが、一箇の「経済的社会」を構成しているものであって、たとえ、それが局部的な一地方に限られ、しかも、その地方において未だ現物経済の要素が根強く残っているとしても、しかも、それはりっぱに一箇の「商品経済」を形成しているといわねばならない。要するに、商品経済とは、「自己の労働によって生産したもの」では存立できず、「自己の私有物」を相互に私的に交換しあうことによってはじめて存続を保証されるところの、私的生産者相互の関係、それらの経済関係にほかならないのであって、このような私的生産者の存続を支える「生産および交換における関係」の下におかれた社会成員の範囲および交換される労働生産物の種類と量とがいかに限られたもの、「一部のもの」であろうと、いささかも変りはないのである。この同じ「生産および交換における関係」の下におかれた生産者全体がひとつの「経済的社会」を構成しているのであって、しかも、その私的交換に供される労働生産物がそれぞれの私的生産者についてたとえ一種類であっても、それはりっぱにひとつの「商品経済」を成しており、しかも、重要なことは、この限られた種類と量の労働生産物の私的交換がしだいに拡大＝発展して、一方においては、現物経済の中に喰いこみ、労働生産物の商品形態の発展をうながし、他方においては、商品交換の地域的範囲を漸次に拡大して行き、かくして商品経済は必然的に「深く、かつ広く」発展していくことになるということである。このようにして、商品経済は、ひとつの歴史的な社会全体をその網の目の中に完全に編みこんでしまうことになるばかりでなく、

さらに数箇の社会をも同時にその同じ網の目の中に組み入れることになるのである。以上のような、商品経済の本性、とりわけその必然的発展の法則および歴史的発展の過程[12]を正しくとらえるときに、商品経済と「社会」との関連も、正しく事実照応的に理解され、かくして、右の論者の「商品経済＝一〇〇パーセント商品交換社会」説の論理的性格のほども的確にとらえられるのである。以上のことは、これからの検討にとって決定的な意義をもつものであって、このことは行論においてただちに実証されるはずである。

(12) 現物経済と商品経済とを、この論者のように、「一〇〇パーセント商品交換社会」という言葉を操って、絶対的に関係ないものとして区別することが完全に誤りであることは、現物経済の商品経済への移行＝発展の関係をすこしでも「具体的に」考えてみれば自明のはずである。たとえば、必要生産物（うち生産手段二〇種、消費手段五〇種）七〇種を自足的に生産していた直接的生産者もしくは原始共同体もしくは奴隷的または、封建的荘園において、そのうちのわずか生産手段一種消費手段二種が私的に交換され、かくして、その必要生産物のうちのごく一小部分が商品形態を採ることによってその存続が支えられることになったとき、この生産者もしくは生産体の経済は、現物経済というべきであるか、それとも、商品経済というべきか？ このさい、「一〇〇パーセント商品交換社会」ではないからそれは商品経済ではないなど主張することが、いったい、なんの役に立つだろうか？ 「一〇〇パーセント現物経済」か、しからずんば「一〇〇パーセント商品交換社会」＝「一〇〇パーセント商品経済」か、――この二つ以外に何も考えられないというようなことで、どうして、「経済」が、「経済的発展」が理解されるであろうか？

つぎに、**第二パラグラフ**について、これを構成する各文章そのものの意味内容を――前稿においておこなったと同様に――すこしく立ちいってみてみよう。

① **「商品形態自身も実際又斯かることを想定して居るといえるのであるが、しかし具体的に、歴史的に、斯かる**

社会は存在しないのである。」――ここで、「斯かることを想定している」とは、どういうことであるか？　「斯かる社会」という同じ「斯かる」という規定をもった言葉から推察すれば、要するに、「斯かること」とか「斯かる社会」とかいうことは、さきの第一パラグラフにかかげられた「一〇〇パーセント商品交換社会」のことを指しているものと考えられる。だが、はたして「商品形態自身」は、このような「一〇〇パーセント商品交換社会」を「想定している」ものであって「一〇〇パーセント商品交換社会」を前提として――つまり「想定」して――はじめて考えられるようなものであろうか？　あきらかに否、である。なるほど「商品形態」の本質を看破することは、もっとも発展した商品生産社会――すなわち「一〇〇パーセント商品交換社会」――のもとにおいてはじめて可能となる。だが、「商品形態そのもの」は、たとえ「一〇〇パーセント」ならずとも、「六〇パーセント」でも「七〇パーセント」でもおよそ「労働生産物」が私的に交換されるかぎり、いいかえれば、私的所有と自然発生的な社会的分業の存するかぎり、りっぱに存在することができる。「商品形態自身」が「想定している」ものは、「一〇〇パーセント商品交換社会」ではなく、まさに、「私的所有と自然発生的な社会的分業」でなければならぬ。この論者は、「商品経済」のみならず、「商品形態自身」さえも、「一〇〇パーセント商品交換社会」でなければ存在しないという主張をかかげ、この「一〇〇パーセント商品交換社会」はまさに現在の資本主義社会以外にはありえないことを先刻承知の上で、「斯かる社会」は「具体的に、歴史的に」存在しない、などと云っている。これは、「一〇〇パーセント商品交換社会」は「一〇〇パーセント商品交換社会」以外にありえないと云うのとまったく同じたぐいのものであって、きわめて意図的なトウトロギーでしかない。この場合、「具体的に」などと云う言葉を挿入して、この種のトウトロギーの本質をカバーしてみたところでとうていかくしおわせるものではない。いったい社会そのものが、「具体的に」では

なくて存在することがあるだろうか！　「抽象的に」存在する社会などというものがはたしてあるであろうか。

② **「それは社会の一部には、種々なる社会に存在し得るのであるし、又恐らく中世都市ではかなり安定的に斯かる関係が、それも亦中世的制約を受けつつ存続し得たとも云えないことはないであろうが、しかし何れにしても斯かる関係が一社会を支配的に規定するということはなかった」**（傍点―山本）。　まず、傍点をつけた二つの言葉――「それ」、「斯かる関係」――に注意されたい。最初の「それ」はなにを指していわれたものか？　その前の文章の中でこれを求めれば、「商品形態」と「斯かる社会」の二つの中のどれかでなければならぬ。もちろん「斯かる社会」では意味をなさないから、「それ」は「商品形態」ということになる。では、「斯かる関係」とは、なにか？　「関係」は「商品形態自身」とは直接関係はないから、おそらく「斯かる関係」とは、「それは、――すなわち商品形態は、――社会の一部には、存在し得る」ということであろう。

そこで、まず問題は、「商品形態が社会の一部に存在する」という言葉であり、このことが「中世都市」で存続し得たという指摘である。こういう言葉や指摘は、はたして正しいものといえるであろうか？　それらは、たんに論理的にみてすらも、はたまた「具体的に、歴史的に」みてさえも、まったく誤りであることはあきらかである。「社会の一部」ということは、「社会の他の一部分」は「商品交換」に関係がないということである。ところが、中世において、ほとんどすべての農民も手工業者もその労働生産物の一部をかならず商品として交換していたものである。この社会では、ほとんどすべての成員が、ほとんどすべての経済単位が、したがって社会のほとんどすべてが商品交換に依存しており、なんらかの形で、程度の差こそあれ、ほとんどすべての社会成員が商品経済の網の目の中に編みこまれていたのである。この場合「一部」という言葉が妥当するのは、「社会」についてではけっしてなく、「労働生産

物」についてでなければならぬ。全体としてみた労働生産物の中の一部分が商品交換に出されたがって商品形態を採らざるをえないということは、「社会の一部に商品形態が存在する」といったような言葉とは、さらさら関係はない。このばあい、むしろ商品形態は、「社会の全部」「全範囲」にわたって、存在しているのである。「社会の一部」という言葉のこのような迷妄ぶりは、「中世都市」について「斯かる関係が安定的に（!?）存続し得た」という指摘においていよいよあきらかである。ここでは「一部」どころではない。むしろ「都市」全体が「商品経済」の上に、これを基盤として成り立っていたと云っても過言ではない。このことは、「中世都市」を「具体的に、歴史的に」考察してもあきらかであり、また、「抽象的に、論理的に」考察しても、都市と農村との分離というひとつの関係そのものに照らしても、おのづから理解されるところである。

ところで、この論者の例によって例のごとき意図的論法を示しているのは、最後の「斯かる関係が一社会を支配的に規定することはなかった」という文章である。いったい「一社会を支配的に規定する」とは、どういうことを意味しうるであろうか？　さきの「斯かる関係」とは、「社会の一部に、商品形態が存在する」ことであったが、ここの同じ「斯かる関係」という言葉を右と同じものとすれば、右の文章はあきらかに無意味な自家撞着でしかない。「一部に在る」ものが「一社会全体を支配的に規定する」ものであるという言葉自体成り立たない。では、さきの「斯かる関係」とはまったくちがった意味をもつものとして――このようなことは論理的にとうてい許されるものではないが――あとの「斯かる関係」の中味をば「商品形態が社会に存在する」ことと解したときはどうであるか？　そのときには、問題は「一社会を支配的に規定する」という言葉の意味内容そのものにかかわるものとなる。この論者がここでことさら例証として引いている中世都市をとってみよう。いったい、中世都市というひとつの「社会」について

みたばあい、ここでは「商品形態」、「商品経済」が「支配的に規定する」ものとなっていないであろうか？　そもそも、中世都市はその成立そのものを、自然発生的な社会的分業とこれにもとづく商品交換との発展に負っているものではないか？　なるほどこの論者の云うように、たしかに「中世的制約」を受けていたことは事実であるが、しかし、このことは、けっして当時商工業経済の拠点としての中世都市の意義を、したがってまた「商品交換が、中世都市を支配的に規定していた」という事実を排除するものではない。この論者は「支配的に規定する」という言葉の「支配的に」という文字についてきわめて特異な理解をもっているもののようである。「支配的に」という文字は「規定する」という動詞に附せられた限定詞である。つまり、「商品形態」、商品交換が社会全体にわたっておこなわれているかどうかを規定しているのである。このことは、この論者自身説いているさきの「社会の一部」という言葉に照らしても自明である。中世都市について商品交換、商品経済が全社会的におこなわれ、したがって中世都市が全体としてこれによって規定されざるをえなかったことは、いまさらいうまでもないところである。ところで他方において中世都市はまた、全体として商品経済とはまったく質を異にする中世的諸関係によっても支配されていたのである。つまり、中世的諸関係も同じくこれを「支配的に規定していた」のである。この論者は、「支配的に規定する」ものはたったひとつでなければならぬと考え、このばあいの「支配的に」という言葉を、商品経済と中世的関係とのどちらがどちらを圧倒して支配しているかという、両者の関係について規定する限定詞と心得て用いるようであるが、これは、あきらかに国語的にみても論理的にみても濫用である。しかも理論的にみて、両者ともに中世都市の一部でなく、これを全体として「支配的に規定していた」ことは事実であって、むしろこの両者の独特な絡み合いの中にこそ中世都市のひとつの本質的特徴が見出されるともいうことができるのである。だが、いづれにせよ、「斯かる関係」

が「一社会を規定するかどうか」という本来あるべき問題を、ここでにわかにすりかえて、それが「支配的に規定するか、支配的にではなく規定するか」というように、規定そのものから「支配的に」という限定そのものにおきかえて、「支配的に」はないと『結論』づけたりする論法は、例によって例のごとき論理的詐術といわざるをえない。このことは、つぎの文章に照らしてみても歴然たるものがある。

③　**「寧ろ商品経済が支配的に行われる社会は、資本主義社会として始めて現われるのであって、斯かる独立の小生産者の社会としてではない。」**――さきに第一パラグラフにおいて、この論者が、「商品経済」とは「一〇〇パーセント商品交換社会」のことだとしていたことはいまだわれわれの記憶に新しい。このような「商品経済」概念からすれば、「商品経済が支配的に行われる社会」という言葉そのものは成り立たない。この言葉そのものは、この論者の意図とはむしろ正反対に、「商品経済」はひとつの社会において「支配的に行われる」こともあれば「支配的にではなく」行われるばあいもあることを、文字どおりりっぱに裏書きしているものである。ところで、「商品経済が社会の一部ではなく、社会全体にわたって支配的に行われる」ことは、この論者のいうようになにも「資本主義社会」のみに限ったことではない。論者自身の引証した中世都市にしても、商品経済がりっぱに全般的におこなわれていた。この論者は、中世都市について「斯かる独立の小生産者の社会」という言葉を用いている。これはまことに奇妙である。第一に、小生産者が「独立」であるならば、何故に「中世的制約」を云々するか？　第二に、「独立の小生産者」ということは、自然発生的社会的分業の下にある本来的私的所有者＝生産者のことであって、これは、正真正銘の商品生産者であり、りっぱに商品経済の網の目の中に組み入れられたものである。だから、そこで、こういう商品生産者から成り立つ社会で「商品経済」が一部ではなく全般的に支配的におこなわれるのは、当然すぎるほど当然のこと

である。第三に、「斯かる独立の小生産者の社会」という論者自身の言葉は、これまで「斯かる社会」は「具体的にも、歴史的にも」存在しないということをくりかえし力説して来た当の論者の主張とは、まったく相いれない。「斯かる独立の小生産者の社会」があるということは、疑いもなく正真正銘の「単純商品生産社会」が存在すると主張することではあるまいか？　いづれにせよ、「商品経済が支配的に行われる社会は、資本主義社会として始めて現われる」というような文句は、たんに「支配的に」という言葉を適当にあしらっただけの無意味な主張に外ならないのであって、それが、『資本論』冒頭の名文句――「資本制的生産様式が支配的におこなわれている社会」――を、論理的および国語的濫用をあえておかして、拙劣につくりかえただけのものでしかないことはあきらかである。

第三パラグラフについて。このパラグラフは比較的短いので、はじめに注目すべき文句を挙げ、つぎにこれを全体としてとりあげ、簡単に吟味することにしよう。

まず、「**商品経済が斯くの如くその形態規定から想定せられる社会としては存在しない**」という一句について。「斯くの如くその形態規定から想定せられる」という言葉は、いったいどんなことを意味しうるか？　「斯くの如く」という言葉に相当するものは、その前文に見出しがたい。むしろ、論者の主張とは反対に、そのすぐ前には、「斯かる独立の小生産者の社会」が存在したと述べられているのである。それよりも問題なのは、「その形態規定から想定せられる」とは、いったいどんなことか？　まず、「その」とは、何についてのそのであるか？　もし、このそのが「商品経済の」ということであるならば、右の一句はまったく無意味なくりかえしにすぎない。またもしこの「その」が「商品形態の」という意味であるとしても、ノンセンスなことは変りがない。そもそも「形態規定」という概念が妥当するのは、このばあい「商品」だけであって「商品経済」にも「商品形態」にも妥当しえない。労働生産物が

商品形態をとること、すなわち、商品そのものが労働生産物の形態規定なのである。ところで、「労働生産物が商品形態をとることから想定される社会」とは、どういうことであろうか？　それは当然に「生産手段の私的所有と自然発生的な社会的分業のおこなわれている社会」ということでなければならないし、このような私的所有のおこなわれている社会は、「具体的にも」「歴史的にも」りっぱに存在したものである。この「私的所有の社会」を考えるさいにその「社会」には原始共同社会、奴隷社会、封建社会、資本主義社会の四つの「社会」しかないと考えるのもまことに奇妙であるし、さらに論者自身の「斯かる独立の小生産者の社会」という断定も、第四パラグラフの最後で強調している同じく論者自身の「資本主義は商品経済をその根本原則とする社会」であるという主張も、この「私的所有の社会」を裏書きしているものであることに御当人自身気がつかないこともますますキテレツである。

「資本家の居ない商品経済の社会、貨幣のない商品経済というものは単なる空想の産物に外ならない。商品と貨幣、商品と貨幣と資本との間には更に根本的な関係があるのである。実は、資本のない、商品と貨幣との商品経済自身が已に社会的には存在しえないのである。それは部分的には、或いは一時的には存在し得るのであるが、全社会的に存在しえない。貨幣の流通は、必然的に資本の発生をもたらさざるをえない。而もそれさえ社会全体に支配的に行われるには、資本家的生産方法として発展せざるを得ないのである。」――この一節は、まことに傾聴に値するものであって、それがどういうことを示しているかということは、この一節をばその最初からではなく反対に、その最後の文章から読むとき一目瞭然となる。

まず、最後の文章が示しているのは、「貨幣の流通」にもとづく「資本の発生」そのものが、資本主義社会以前にも、「社会全体に支配的に」ではなく、おこなわれ、しかも、それが必然的に「資本家的生産方法として発展せざる

を得ない」ものであって、その必然的発展によって「資本家的生産方法」が生みだされ、かくして、「資本の発生」がはじめて「社会的に支配的に行われる」ようになったものだ、ということである。つまり「貨幣」も「資本」も「資本主義以前の社会」において発生し、発展をとげ、はじめは「社会の一部」であったものが、それ自身、その他のなんらの「動力」をも借りることなしに、独力で、「社会全体に支配的に行われる」にいたり、かくして「社会全体を支配的に規定する」にいたったもので、また必然的に「支配的に規定するもの」とならざるをえない、ということが明確に述べられているのである。さらに「貨幣の流通」がはじめて「資本の発生」をもたらしたという、最後から二番目の文章と読み合せれば、「資本家の居ない商品経済の社会は、たんなる空想の産物」とか「実は、資本のない商品と貨幣との商品経済自身が己に社会的には存在し得ないのである」などという、この論者の相も変らぬ持論が、いかに馬鹿げた「たんなる空想の産物」であるか、それが「実は、論者自身の主張とこの上もなく美事に矛盾しており、論理的にみてすら存在し得ないものである」かは、うたがう余地がない。「部分的」または「一時的」には存在し得るが「全社会的」には存在しえないなどという、飾り文句も、この場合、まことに笑止千万というのほかない。いったい「一時的に」のみ存在し得た「商品と貨幣との商品経済」が、どうして「必然的に資本の発生をもたらさざるを得ない」のか、どうして「部分的に」のみ「一時的に」のみ存在し得るものが、それ自身の必然的発展によって「社会全体に支配的に」なるようになりうるか!?

もしまたここで、この論者がその例によって例のごとき論法で、「商品経済」とは「一〇〇パーセント商品交換社会」のことだと云って、右の一節の完全な混乱と錯誤とを弁解しようというのであれば、そもそも「商品経済が斯くの如くその形態規定から想定せられる社会としては」とか、「資本家の居ない商品経済の社会」とか「貨幣のない商

品経済」とか、さてはまた「商品と貨幣との商品経済自身」とかいう、いっさいの文句は、まったく無意味なタワ言でしかないことになる。

要するに、右の一節はこの論者の持論とは正に反対に、「資本家の居ない商品経済の社会」、「商品と貨幣との商品経済自身」がりっぱに「具体的に」も「歴史的に」もはたまた「論理的に」も――存在し、この「商品と貨幣との商品経済自身」が「必然的に資本の発生をもたらし」、かくして、「資本家的生産方法」をも生み出し、「社会全体に支配的に行われる」にいたるものであることを動かしがたく論証しているものである。

つぎに、**第四パラグラフ**について。

① **「勿論、市場の関係としては、商品関係は、原則として単純なる商品交換に想定せられるようなものを展開して居ると云える。」**――この文章は、資本主義社会について述べられているものだという点を念頭においておかねばならぬ。まず「市場の関係」とは、このパラグラフの最後の文章が示しているように、「買手と売手との関係」ということである。商品関係とはいうまでもなく、商品生産者が相互にとり結ぶ関係、商品交換関係のことであり、したがって、商品の売手と買手との関係をふくむものである。それゆえ、右の文章は、それ自身まず第一に、およそ無意味なトウトロギーを示している。つぎに注意されるのは、「原則として単純なる商品交換に想定せられるようなもの」という言葉である。この「想定されるようなもの」とは、論者によれば、驚いたことに実は、売手と買手との関係のことである。この売手と買手との関係は、なにも「原則として単純なる商品交換に想定されるようなもの」ではない。「単純」であろうと、「複雑」であろうと、「商品交換」そのものは、売手と買手との間の交換以外の何物をも意味しない。それは、「商品交換」そのもののことであって、「商品交換」に「想定される」ものでもなく、いわん

やそれに「想定されるようなもの」でもない。この場合、「展開している」などという「飾り文句」は、かえって滑稽である。売手と買手との関係は、いつまでたっても――「単純な商品交換」以来はじめからおわりまで終始一貫――売手と買手との関係そのままであって、どうにも、どこにも、「展開」しようのないものである。

ところが、論者は、右のごとき「売手と買手との関係」の「展開」の例として、資本家と労働者の関係をもってきて、「労働者が賃銀で資本家から生活資料を買い入れる場合」と、「資本家が労働者を雇い入れるとき」は、両者の関係は「売手と買手との関係にすぎない」と強調している。このような主張そのものはまったく誤りとはいえないが、しかし、「市場においては資本家と労働者とがたんなる売手と買手との関係に立つ」という側面をいくら強調してみたところで、本来「原則として商品交換に想定せられるようなもの」すなわち「独立の小生産者」の相互関係は出て来るはずもなく、また資本家と労働者との本質的関係も解りようはない。「市場の関係」だけをとり出して見るということは、その背後にかくされた真実の内容――生産関係――をとり上げないで、むしろこれを全然見ず、または捨象してしまって、たんにその内容にいわば附着しているにすぎない皮相な一つの形式的現象だけをとり上げるということであり、しかも、その同じ資本家と労働者との間に見られる「買手と売手」および「売手と買手」との二つの関係を統一的にとらえることをせず、これを勝手に切り離して、故意に孤立した現象として観察するということである。それゆえ、「市場の関係」は、資本家と労働者との関係をインペイするものであって、資本家と労働者が「売手と買手の関係を展開している」などと云うのは、本質的関係をとらええない俗物的見地からのみ可能なことである。ところが、あきれたことに、この論者は、その俗物的見地にもとづいてとらえられた当の「売手と買手の関係」は、それ自身の展開を「基礎にして」資本家的生産方法を「展開」しているなどと主張しているのである。

②「市場に於いては資本家と労働者とでさえ売手、買手の関係を展開し乍ら而も資本家的生産方法が、此れを基礎にして展開せられ得る点に、資本主義が商品経済をその根本原則とする根拠があるのである。」――みられるように、「市場における売手と買手との関係」を「基礎にして」資本家的生産方法が「展開せられ得る」という言葉は、まったく誤りである。資本家的生産方法は、いったい、なにを「基礎」としてはじめて「展開」されるのか？　それは、労働力以外何物をも所有しない労働者と、これにたいして、自らは労働力として働かず生産手段と貨幣とを所有する資本家とを、すなわち、資本制的私的所有という生産関係を「基礎」としてはじめて「展開されえた」ものである。たんなる売手と買手との関係という「市場の関係」など、けっしてその「基礎」となりえないことは、売手と買手という言葉そのものの意味をまともに解しただけでも明瞭である。右の資本制的生産関係そのものが、労働者を「労働力」の売手として、資本家を「労働力」の買手として、市場に登場せしめるのであって、この場合決定的に重要なことは、たんなる「市場の関係」つまり「売手」一般と「買手」一般との関係ではなくして、「労働力」の売手と「労働力」の買手との関係、すなわち、資本制的私的所有の関係である。この資本制的私的所有、いいかえれば、資本制的生産関係は、本来的私的所有のもとでの商品生産の発展そのものが必然的にこれを生みだしたものであって、この意味において商品生産関係いいかえれば商品経済こそ、資本家的生産方法の「展開」の一般的「基礎」であり、「前提条件」である。

それゆえ、「市場関係」＝「売手と買手との関係」を「基礎」にして資本家的生産方法がはじめて「展開せられ得る」点に、「資本主義が商品経済をその根本原則とする根拠がある」などという主張は、理論的にみて誤りであるばかりでなく、論理的に見ても、まったく支離滅裂のものといわなければならない。そもそも「商品経済」とは、この論

者によれば、「商品交換関係」であり、したがってすべての成員が「商品の売手と買手との関係」に立つことにほかならない。だから、「売手と買手との関係」を「基礎」にして資本家的生産方法が、したがってまた資本主義が「展開せられる」ことを「根拠」としてはじめて資本主義が「商品交換関係」、「売手と買手との関係」をその根本原則とすると云うのは、まったく無意味なくりかえしにすぎない。のみならず、「商品と貨幣との商品経済」とか「単純な商品経済」とかいう、論者自身しばしば「展開」している用語法からすれば、「資本主義が商品経済をその根本原則とする」などという主張自体、論理的にみてまったく成り立ちがたいものである。「根本原則」とは、いうまでもなく、もっとも本質的な経済的原則ということであって、資本主義については、この「根本原則」は、「資本制的生産関係」と結びついた資本制的商品生産以外にはありえない。

第五パラグラフについて。

① **「しかし又個々の商品も之を商品経済の要素的商品として考える場合には、具体的に歴史的に認められる所謂単純なる商品とは、非常に異ったものを要請することになる。」**——ここでの「個々の商品」とは、いうまでもなく資本主義社会での商品のことである。ところで「商品経済の要素的商品」という言葉は、どんなことを意味しうるか？「商品経済」とは、労働生産物が商品として交換される社会関係のことであって、商品を離れて「商品経済」なるものはありえない。つまり「商品経済の要素的商品」とは「森林の要素的樹木」という言葉と同じく、まったく愚にもつかぬただのくりかえしにすぎない。これはおそらく『資本論』冒頭の有名な言葉——「資本主義社会の富の要素的形態としての商品」——を拙劣に誤って引き写したものであろう。「資本主義社会の富」と「商品経済」とは似ても似つかぬものであり、「要素的形態としての商品」と「要素的商品」とは、まさに月とスッポンのちがいである。

ところで「商品経済の要素的商品」とは、たんなる商品、あるいはこの論者の好みの表現を用いれば、たんなる「商品形態」以上の何物でもない。また、「具体的に歴史的に認められる所謂単純なる商品」という言葉についてみても、それがある特定の「具体的、歴史的」社会、たとえば封建社会の労働生産物でありながら、なぜ「単純なる商品」と云われるかといえば、要するにそれに附着するいっさいの非商品経済的要素をとりのぞいたもの、「商品形態」にとって外的ないっさいの要素を捨象して、たんなる商品としてとらえたものであるからであり、またそのかぎりで「単純なる」という規定が妥当するのである。したがって、「商品経済の要素的商品」としての商品と「単純なる商品」とでは、まったくなんらのちがいもありえない。この論者は、「非常に異ったものを要請することになる」などと力説しているが、その「非常に異ったものを要請されている」のは、のちに論者自身が誤って説明しているように、「商品経済の要素的商品」の規定そのものについてでなく、むしろこれとはまったくなんらの関係もない「社会」そのものについてなのであって、このように「要素的商品」の規定の問題を「社会」の問題にすりかえることは、例によって例のごとき論理的ペテンの適用にほかならないのである。

② **「商品経済が一社会の根本的社会関係を規定するものになる為めには、理論的には勿論のこと、具体的にも或る程度迄支配的に、有らゆる生産物が、歴史的、具体的に云えばその社会の成員の大部分の人々の生活資料そのものが商品として買われて始めて個々の人々の使用に供せられるものにならなければならない。」**――まず、「理論的には勿論のこと、具体的にも」という一句に注目されたい。社会のあらゆる生産物が商品になることは、具体的にそうなるのであって、「抽象的に」とか「理論的に」そうなるのではない。あらゆる生産物が商品になるというのはあくまで具体的な事実であって、この具体的事実の理論的意味をわれわれが問題とするのである。だから、「理論的には勿論の

こと」などという言葉は、当の論者そのひとが、あらゆる生産物が商品になるということは「理論上でそうなるのか」「具体的にそうなるのか」さっぱり判っていないでただこの二つの単語だけをひねくり廻していること、要するに、理論と事実との関係を、したがって理論そのものの本質的規定をまったく理解していないことを端的に示すだけのものである。ところで、あらゆる生産物が商品として交換されるということは、例の「一〇〇パーセント商品交換社会」ということであって、これはまさしく、この論者のいう典型的な「商品経済」のことである。したがって当然に右の文章全体はつぎのようになる、――「商品経済が一社会の根本的社会関係を規定するものになるためには、その社会が完全に商品経済にならねばならぬ。」ごらんのように、この論者の文章は、「理論的には勿論のこと具体的にも」完全なトウトロギーにすぎない。しかも、それはたんに愚劣なトウトロギーというだけではなく、さらに論理的にみれば、きわめて意図的な詐術がふくまれていることを見逃すことはできない。それは、商品が完全にその社会で一般化するあるいは支配的なものになるということと、商品経済がその社会の「根本的社会関係を規定するもの」になるということとを、まったく同じものとして通用させているところである。

まず、「商品経済が支配的なものになっている」社会とはなにか、といえばいうまでもなくそれは資本主義社会である。ところで、資本主義社会の「根本的社会関係」とはなにか？　それはまさしく資本制的生産関係であり、所有者＝非労働力なる資本家と非所有者＝労働力なる賃銀労働者との社会関係である。では、「商品経済」はどういう社会関係をあらわすかといえば、第一パラグラフにも示されているように、社会の成員がその労働生産物を私的に商品として交換する関係であり、同じ私的生産者＝私的所有者相互の関係であり、いいかえれば、資本制的私的所有に発展する以前の本来的私的所有の関係である。それゆえ、より未発展の、未分化形態である本来的私的所有の関係をあ

らわす「商品経済」が、それ自身の発展した分化した形態たる資本制的私的所有の関係をあらわす「根本的社会関係」を「規定するものになる」などという文句は、まったく成り立ちえない、純然なるタワ言にすぎない。より厳密に云えば、これは一種の論理的錯倒であって、「資本制的生産関係」は、より発展した、規定された「商品生産関係」すなわち「商品経済」にすぎず、「商品生産関係」そのものが規定された「商品生産関係」を規定しようにも、規定しようはないのである。すなわち、右の文章は、たんなるくりかえしとすりかえと錯倒との三つの要素からのみなる独断的主張にすぎないことがこれで明白となるのである。

③　**「所謂単純なる商品経済は、その点で生活資料そのものはなお多かれ少かれ自家で生産せられ、消費せられ乍ら、その余剰が商品として販売せられるというような関係に立って居る。少くとも社会の圧倒的部分の人々がかかる状態にあって行われる商品経済と云えるであろう。したがって社会的に云えば已に単純なる商品そのものが一種の抽象的存在の如きものとなって居る。それだからこそ部分的にのみ成立し得るのである。」**――まず、「商品経済」という言葉について、この論者が、「一〇〇パーセント商品交換社会」とはまったくちがった意味を与えていることに注意されたい。要するに、それは「一〇〇パーセント」であろうと、「四〇パーセント」であろうと労働生産物が商品として交換されることによってその存続がはじめて保証される関係を指していっていることは、このパラグラフでの用法からみて、うたがいない。（とすれば、さきの「商品経済の要素的商品」などという言葉のアイマイさはいよいよ甚しいものだといわねばならぬ。）ところで、「単純なる」という規定をもつ「商品経済」について、論者は、「生活資料は自給自足で、その余剰だけが商品として販売される関係」だとしている。このような説明は、はたして正しいと云えるであろうか？　それは、正しくないばかりか、「理論的には勿論のこと、歴史的にみても」完全に誤った

ものであるといわねばならぬ。まず、「生活資料の余剰が商品として販売される」などという関係は、けっして商品経済とはいえない。この言葉は、どういうことを意味しているかと云えば、「生活資料そのものは多かれ少なかれ自家で生産し、消費する」のであるから、完全な自給自足経済ということである。このことを判断するのはしごく簡単である。「生活資料の余剰」が生じなかったときには、「商品として販売される」ものは何ひとつなく、しかも「余剰」はあくまで「余剰」であって当の生産者にとって必要以上のものであるから、なんら重要な意味をもたない。必要はすべて自給自足、すなわち現物経済であって、「単純」にせよ「抽象的」にせよここには商品経済はなにひとつ存在しないことになる。「社会の圧倒的部分の人々が自給自足経済で、生活資料の余剰を商品として販売するような状態」を「商品経済と云えるであろう」などと云うのは、まったくタワ言である。この論者は、必要物資としては生活資料しか考えることができず、しかも「単純な商品経済」のもとですべての生産者は生活資料を自給自足していると思いこんでいる。だが、残念なことに、生活資料を生産するためには、生産手段が必要であり、たとえば、農具—鋤—のごときものは、すべての農民が自家生産することなどとうてい思いもよらぬ。「余剰」ばかり商品交換していてどうしてこの必要生産手段を自分の手に入れることができるか？　また手工業者をとってみても、その販売する手工生産物は、はたして「余剰」であろうか？　要するに、「商品経済」についてのこの論者の観念は、「理論的には勿論のこと、歴史的にみても」まったく成り立ちえないデタラメのものだと云うことはあきらかである。自分の必要生産物——生産手段および消費手段——のある部分を商品交換することによってはじめてその存続が保証される関係、「余剰」ではなく規則的に生産される生産物部分が必ず商品形態をとり私的に交換されることによってはじめて再生産が保証される関係こそが、まさしく「商品経済」であって、この場合交換される生産物が自分の生産物の一部分であろ

うと大部分であろうと、事柄そのものにはいささかも変りない。一部分だから「単純な商品経済」だなどと云うのは、「単純な」という質的規定を「一部分」というたんなる量的規定にすりかえるものであって、論理的にみてすらとうてい許されないものである。しかもこの場合、たとえほんの一部分であろうと、私的に交換されることによって相互にその再生産を保証されるものであるならば、それはりっぱに「商品」なのであって、ほんの一部分の生産物ならば「単純な商品」だというのも、同じくまったくのタワ言である。生産物部分が――商品として――私的に交換されることによって再生産が保証される社会的関係が、まさしく商品生産関係であり、これを理論的に云いあらわせば、生産手段の私的所有（およびこれに結びついた自然発生的な社会的分業）ということである。それゆえ、この論者が、右のような「余剰」商品経済なるものを説いて「したがって社会的に云えば己に単純なる商品そのものが一種の抽象的な存在の如きものとなって居る」などという『論理的』結論を並べ立てれば立てるほど、論者自身の論理的並びに国語的理解能力の限界を示さずにはいないという効果だけを発揮することとなる。いったい、「一種の抽象的存在の如きもの」とは、どんなものであるか、ひとつこの一連の言葉について解説してもらいたいものである。労働生産物はすべてりっぱな現実的生産物であり、これによってはじめて生産者の存続が可能となるものばかりである。そのうちの一部分が商品として交換されるときには、この私的に交換される生産物部分によって生産者の存続が保証される。これらはすべて「一種の抽象的存在の如きもの」どころではなく、社会の成員を支えているところの必要不可欠の現実的生産物、いわば「現実的存在」であって、それは、社会の成員の存在とまったく同じ性質のものである。最後に同じく論理的および国語的錯乱を示しているのは、「それだからこそ部分的にのみ成立し得る」という言葉である。いったい、商品そのものが「部分的に成立しうる」とは、どういうことであるか？　商品は、私的に交換される

かぎりで商品であり、私的に交換されるかされないかが、商品となるか商品とならないかを区別する唯一の基準である。「部分的にのみ成立しうる」などというのは、「商品」そのものの範囲または交換される範囲が社会的にみて「部分的」であるかどうかということを、誤って「商品」そのものの「成立」が「部分的か」どうかということにすりかえただけのもので、まったくのタワ言でしかない。

ごらんのように、いつまでたっても、「単純なる商品」についての本質的な規定についても、「単純なる商品」の独自的な意義についても、一言の説明もなく、相も変らぬ論理的すりかえと国語的濫用ばかりで表面を糊塗しているという有様である。

では、**第六のパラグラフ**については、どうか？

① **「有らゆる生産物が商品となるということは、云い換えればその生産物の生産者自身が自己の生産物を直接には消費し得ないことにならなければならない。労働者のように自己の生産した生産物を商品として買わなければならないということになって、始めて商品経済は全面的に徹底的に行われて来る。」**——まず、第一の文章について、「有らゆる生産物が商品となること」は、なるほど、言葉そのものとしては、どんな生産者でもすべて「生産者自身が自己の生産物を直接に消費し得ないこと」と同じことを意味する。この言葉のいわゆる「綾（あや）」は「有らゆる生産物」の「有らゆる」にある。だが、こういう言葉を並べてみても、実際にはなんらの意味をもち得ないことはただちにわかる。われわれは、自分自身が消費するために、自分自身にとって必要な物をつくりだすために自分の労働力を支出することは、いくらでもありうる。労働生産物はけっして、そのすべてが売られるものではないし、また、そのすべてが売られなければならないということにはけっしてならない。たとえば、ビスケットをとってみよう。これは、ど

んな生産方法によるにせよ、一定の原料と道具に人間的労働力の一定量の支出があってはじめて生産されるものであって、りっぱな労働生産物である。ところで、われわれが自分の家で自家用につくるビスケットはなんらの労働生産物でもなく、工場で商品としてつくられるビスケットだけが生産物なのだ、などと云えるであろうか？　農民はいうに及ばず、労働者が自分で消費するためにつくったビスケット、娯楽品あるいは種々の小道具などは、いったい生産物ではないであろうか？　この論者が、「有らゆる生産物」などという、まったく無意味な「規定詞」を挿入して、不用意な読者をこっそりと、「労働者のように自己の生産物を商品として買う関係」に引き入れてしまおうとしていることは、あきらかではないだろうか？　そもそも「あらゆる生産物」という、いわば量的規定をもってきて、資本制的生産関係のもとでの商品生産をひき出そうとするのは、はじめから論理的に云って無理なのである。また、「その生産物の生産者自身が自己の生産物を直接には消費しえないことになる」ということは、けっしてそのまま「あらゆる生産物が商品となること」を意味しない。「逆は必ずしも真ならず」である。なぜならば、「自己の生産物を直接には消費しえないこと」は、第一には、社会的分業の進展によってその生産物が生産手段となりさらには生産手段の一部にすぎないものとなる社会的生産物部分の増大を意味するからであり、第二には、資本制的生産関係のもとでの賃銀労働者による生産を意味するからであり、そして第三に、以上二つのことはけっして、「あらゆる生産物が商品となる」ことを必要条件とするものでもなく、これとはまったく関係のない事柄だからである。

それゆえ、もし右の第一の文章を根拠として第二の文章をひき出して来るならば、このような論法がまったくでたらめのものであることはあきらかである。ところで、この第二の文章について注意すべきは、「商品経済は全面的に徹底的に行われて来る」という箇所である。「全面的に、徹底的に」という言葉は、おそらく、社会的にみてそうなる

ということであろう。社会全体について、いいかえれば、社会を支えているすべての生産について、したがってまたすべての生産者について、それが商品経済の網の目の中に「全面的に、徹底的に」とらえられるということが、商品経済の「全面化と徹底化」ということであろう。ところで、「労働者が自己の生産物を商品として買わなければならない」とこの論者は云っているが、この「自己の生産した生産物を商品として買わねばならない」労働者は、社会的な直接的生産者のどれだけの部分を占めれば、そう云えるのであるか？　もし、その労働者が直接的生産者の一部分であって、その他にまだ独立的生産者がいるならば、いいかえれば「自己の生産物を商品として買わなければならない」必要のない生産者が相当数いるならば、「有らゆる生産物が商品となる」ことは不可能であり、したがって「はじめて商品経済が全面的に徹底的に行われて来る」こともありえないというのか？　ところでこの論者にはまことにお気の毒だが、独立した直接的生産者が皆無というような資本主義社会はこの地球上にはひとつとして存在しえず、資本主義社会が資本主義社会であるかぎり、いいかえれば、その概念に正確かつ厳密に一致するかぎりでの純粋な資本主義社会であるかぎり、独立生産者の階層は必らず存在しなければならない。しかも、この独立生産者の階層をその必要構成部分とする資本主義社会において、「商品経済は全面的に徹底的に行われている」のである。

もしまた、右の第二の文章が、「労働者が直接的生産者の全部を占めるようになった」ときにはじめて、「商品経済は全面的かつ徹底的に行われる」ということを主張しようというのであれば、この文章はまったく無意味なトウトロギーになってしまう。要するに、この論者は、自分で「商品経済は全面的に徹底的に行われる」などという、聞いたような言葉をあやつってその非論理的論法をごまかそうとしているのであるが、客観的にみれば、かえって自分自身の掘ったおとし穴にわれと陥ちこんでしまっているのである。

なお、右の「全面的に、徹底的に」という言葉は、そのほかにも貴重な意味をもっているので、われわれはその意味を十分「全面的に、徹底的に」汲みとらねばならない。それは第一に、自己の生産物を買わねばならない労働者が出てくる以前には、「全面的でなく、徹底的ではないが」商品経済がりっぱに存在したということを示している。第二に、その以前からある商品経済、つまり「全面的でない」商品経済が、誰の力でもない自分自身の力によって、自分自身独力で「全面的な徹底的な」商品経済に発展してきたものであるということを、いいかえれば、商品経済そのものの発展を、商品経済そのものに即してとらえることが肝要であって、「単純な商品経済」と「発展した商品経済」とをたんなる言葉の「綾」で絶対的に引き離し、両者を万里の長城を以て仕切ることはまったく愚劣でもあり錯誤でもあるということをあきらかに示している。

② **「市場関係だけを抽象して見れば、何れも商品経済には相違ないが、資本主義社会と資本主義以前の社会とではその点は根本的に異って居る。所謂単純なる商品経済の社会ではしたがって、商品経済はその法則を一般社会的基礎に置いて実現して居るとは云えないのである。」**――ごらんのように「市場関係」と「一般社会的基礎」という二つの言葉を並べただけで、この論者が商品経済なるものについていかに貧弱な理解しか持ち合していないかということが明白にわかる。まず、「市場関係だけを抽象して見れば」などという言葉は、およそ無意味なくりかえしであるばかりでなく、完全な誤りでもある。なぜならば、第一に、「売手と買手との関係」という「市場関係」はただ、「商品が交換される」ということの別様の表現でしかない。第二に、商品経済とは、社会の成員が一定の生産関係すなわち私的所有と社会的分業という生産関係のもとでかれらの存続＝再生産をおこなっていることを示すものであって、この生産関係を捨象してしまったところに商品経済はまったくありえない。

つぎに、「その点は根本的に異なる」という「その点」とは、なにか？　前文から推せば、商品経済が「全面的に徹底的に」行われる点ということになろう。資本主義社会と資本主義社会以前で商品経済の行われている社会とを比べて、両者のひとつのちがいが、前者の「商品経済の全面化と徹底化」という点にあるということは間違いない。つまり、資本主義社会以前の社会で「全面的でなく徹底的でない」商品経済は、発展して資本主義社会の「全面的で徹底的な」商品経済になったものだ、というかぎりでは正しい。だが、このことを、この論者のように「一般社会的基礎」というアイマイな言葉をつかってひねくり廻すことは、まったく誤りであり、しかも、悪質な論理的ペテンと云わねばならぬ。「全面的でない徹底的でない」商品経済は、その法則を「一般社会的基礎に置いて実現していない」ことになり、「全面的で徹底的な」商品経済は「その法則を一般社会的基礎に置いて実現して居る」ことになる。つまり、「あらゆる生産物」が一〇〇パーセント商品として交換されれば「一般社会的基礎」が出来るが、八〇パーセント商品交換では「一般社会的基礎」はない、というのである。

この論者のいつもの手であるが、ここでも「その法則」というような得体の知れない言葉が突如として飛び出してくる。そして、このわけのわからない「法則」がこれまた得体の知れない「一般社会的基礎」に結びつけられて、いつのまにか「単純な商品経済の社会」と資本主義社会との「区別立て」が――言葉の上でだけだが――あるもののように作り上げられているのである。これらの論理的および国語的錯乱をいっさい清掃すれば、ここの箇所のそれぞれの個々の言葉の意味しうるところは、およそつぎのごとくである。

まず、商品経済は、私的所有という一定の生産関係のもとで労働生産物が必然的に商品形態を採って交換されざるをえず、この商品交換によってその生産関係のもとにある人間社会がはじめて維持＝再生産されねばならない、とい

うことを示すものであって、商品経済そのものがすでに私的所有という社会的生産関係によって規定された一箇の「法則」であり、この法則はつねに私的所有という「社会的基礎」の上にのみ実存し、また貫徹せざるをえない。ところで、資本主義社会以前の社会、たとえば封建社会は、いうまでもなく封建的な生産関係をその基盤として成り立つものであるが、しかし、その封建的な生産関係の基盤の上でなおかつ私的所有と社会的分業の関係が存在し、発展し、それと同時に商品生産の発展が必然的に行われることになり、また、商品生産のおこなわれるに応じて私的所有（と社会的分業）の生産関係はしだいに拡大し、滲透して行き、商品経済は漸次により「全面的」なものに、より「徹底的な」ものになって行くのである。このばあい、基本的な「社会的基礎」すなわち「生産関係」が封建的だからといって私的所有の生産関係――これも同じく「社会的基礎」である――の併存とその漸次的拡大はありえないとか、商品生産したがって商品経済は「社会的基礎」をもたないとか云うのは、まことに子供だましの形式論理というのほかない。要するに、この資本主義社会以前の社会を「単純なる商品経済の社会」と呼ぶのは、封建的生産関係を一般的基盤としながら、その上にまたこれと並んで私的所有の生産関係が広く存在し、各生産者はその生産物の一部分又は大部分を商品として交換しなければ存続できない社会的関係のもとに置かれていること、ただし、これらの商品生産者がまだ本来的私的所有の関係のもとにあって、資本制的私的所有のもとに置かれるにはいたっていないこと、この商品生産はそれ自身発展せざるをえず、また発展すべきものであって、その発展そのものが一方において封建的生産関係という一般的基盤を掘り崩しつつ、他方において直接的生産者を分解せしめて本来的私的所有の資本制的私的所有への発展を促進し、かくして、商品経済を「全面的に徹底的」におしすすめることによって、封建社会の解体＝資本制的社会への移行を促進しないではおかないということ、――これらの諸関連をすべてふくんでのことであっ

て、然るが故にこそ、「単純なる商品経済」の社会に対して、「複雑な発展した商品経済」の社会＝資本制的社会が対応的に存在するものとなっているのである。このような観点から見るとき、「所謂単純なる商品経済の社会ではしたがって――（この「したがって」は、いったい、なんのための「したがって」か!! なんとあきれた「云いがかり」であることか!）――商品経済はその法則を一般社会的基礎に置いて実現して居るとは云えないなどという文章が全く支離滅裂な、デタラメにすぎないことは、一目瞭然である。また、もし右の文章の意味が――この論者がしばしばやっているように、形式的に、つまり屁理窟的に――単純な商品経済の社会では封建的生産関係が「一般社会的基礎」であって、そこでは商品生産関係はまだ「一般社会的基礎」とはなっていないというようなことだとすれば、これはまた呆れた論法というのほかない。こういうまったく愚劣な形式的屁理窟を事としているような論者には、歴史的社会の発展関係は、いや総じていっさいの事物の相互関係および移行＝発展関係は、完全にチンプンカンプンとならざるをえないし、またこの論者においても事実事ごとにそうなっているのである。

さて、**最後のパラグラフ**をつぎにみてみよう。

「**かくして商品経済の理論としての経済学の分析に於いては、如何に抽象的なる商品を扱うにしてもそれは己に資本主義社会の如く全面的に商品交換の行われて居ることを前提として居るものであって、之を所謂単純なる商品として具体的に歴史的に資本主義以前の商品となすことは出来ないのである。**」――まず、この文章の中で示されている「抽象的」「具体的」という言葉についての独特の用法に注意されたい。この論者は「いかに抽象的な商品を扱うにしても」と云っている。つまり、「抽象的な」という言葉は直接に「商品」を規定するものとして、それ自身で完全な・十分の意味を有しているものとは考えられないで、さらにその上に「どれだけかの」という限定詞がついたとき

にはじめてなんらかの意味をもつもの、つまり、すこしでも「抽象されたもの」ならば、それだけ「抽象的な商品」となるのであって、それだけ「具体的な商品」から離れるというだけの意味しかもたないものとされているのである。このような「抽象的」の用法は、まったく非論理的なものであり、当面の問題解決にとってなんらの足しにならないばかりか、かえってこれを絶対的に不可能ならしめるものといわねばならぬ。

問題は「抽象的な商品」の内容規定にある。その商品が資本主義社会の商品であるならば、資本主義社会を前提することはもちろんであり、したがって「全面的に商品交換の行われて居ることを前提としている」ことも、いまさらいうまでもない。だが、この「全面的に商品交換が行われていること」が「抽象的な商品」そのものの規定にとって、どのような意味をもち、また、どのようにして「抽象的なる商品」そのものを規定するものの中に入りこんでいるかが問題である。このことにまったくふれずに、ただ「前提としている」を何度くりかえしても、なんの役にも立たぬ。この点からみれば、この論者は、最後まで、この規定そのものにすこしもふれていない、いやそもそも規定そのものの問題としてとり上げることができないのである。

つぎに、まことに滑稽なのは、「単純なる商品」をもって「具体的に歴史的に資本主義以前の商品」となしている点である。いったい、「単純なる商品」という言葉そのものが「具体的」な商品をそのままあらわしうるかどうか——こんなことは「単純なる」という言葉の意味を簡単に考えただけでも明らかである。また、「単純なる商品」が一定の「歴史的」な商品をあらわす言葉として採用されうるかどうか——このことも論理以前の問題である。ここの文章のあらすじは、「資本主義社会の「抽象的な商品」は、資本主義社会を前提としているものであって、資本主義以前の社会の商品とはちがう」という、まったく自明のことのくりかえしにすぎない。ところで、資本主義社会以前の

商品をなぜ「単純な商品」と呼ぶか？　そこには封建的生産関係が支配していたではないか！　これを「単純な」というのは、第一には、封建的生産関係を捨象してたんに私的所有の生産関係と結びつきこれをあらわすものとしてのみ商品をとり上げるからであり、第二には、その私的所有は、まだ本来的所有であって、資本制的私的所有という、より「複雑高度な・発展した」私的所有に発展する以前のものであり、したがって、その生産関係と結びついた商品は、単純な商品生産関係すなわち本来的私的所有をあらわすものとしてしか意味をもたないからである。「抽象的」と「単純な」という二つの言葉の論理的意味、それらの関係も考慮することなく、ただ、資本主義の商品は「抽象的な商品」、資本主義社会以前の商品は「単純な商品」と観念的「区別立て」をして、さて資本主義の「抽象的な商品」は、資本主義社会以前の「単純な商品」と「なすことはできない」などと気張って見せたところで、いったい、誰かごもっともという者があろうか？

さて、以上長々と考察して来たところによって、この論者がいかに「抽象的な商品」と「単純な商品」との「区別立て」を「合理化」しようと努めているか、そのためにいかなる論理的および国語的濫用をあえて重ねることを辞さないかは、ほぼあきらかにされたであろう。右は宇野氏の主著『価値論』の「序論」の「一　商品経済と資本主義社会」の中の「二　所謂単純なる商品」の主要部分をそっくりそのまま採り上げてその内容のほどを検討したものであるが、なおこれにすぐひきつづいて「三　個々の商品の抽象性」なる節において、「抽象的なる商品」についての積極的説明を展開しているかに見えるので、その中から、――紙幅の限られている関係上――主要な箇所を抜粋してかかげ、その理論的ならびに論理的内容をできるかぎり丹念に吟味しておくことにしよう。

まず、「単純なる商品」について、「三」の冒頭にかかげられているところを引いてみよう。

〔引用第二〕

「商品経済は、之をその社会的基礎から抽象すると単純なる市場関係として現われ、恰かも資本主義以前の商品の如き観を呈するのであるが、その場合には商品経済を動かす動力とでも云うべきものまで捨象されざるを得ないことになる。勿論、此の動力自身は商品形態そのものに之を求めることは出来ない。しかし斯かる動力をも捨象された商品形態は、如何なる社会形態にも外的なるものとしてあるのであって、実は古代、中世の商品にも具体的には適合しない完全に観念的抽象と云わなければならない。それは生産の基礎と離れて考えられたものである。有らゆる社会の商品に、云わば商品一般に想定せられるものであるが、古代、中世の商品と雖もそれが多かれ少かれ継続的に、繰り返して市場に提供せられる為には、その生産的基礎によって規定せられざるを得ない。所謂単純商品と云われる場合にも、それは斯かる基礎から抽象したものであって、決っして具体的には考察されて居ないのである。尤も商品形態自身は、元来生産とは分離した、云わば之に外的に与えられるものとして の性質を有している」（前出、一九ページ）。

まず、「**商品経済を社会的基礎から抽象すると単純なる市場関係としてあらわれる**」という主張は、誤りである。商品経済とは、労働生産物を商品として交換することによって維持＝再生産される社会的経済関係のことであって、これを「その社会的基礎から抽象する」などと云うことは出来たことではない。これは、「経済から経済関係を捨象する」というのと同じく、まったく馬鹿々々しい背理である。つぎに「単純なる市場関係」という語も誤りである。そもそも市場関係とは、この論者によれば、「売手と買手との関係」であって、それ以上でもそれ以下でもなく、この「売手と買手との関係」には「単純な」ものとか「複雑な」ものなどの区別ははじめからまったくありえない。さらに、「市場関係として現われる」ということも誤りである。商品経済のもとでは、各成員は、売手として現われると同時にまた買手として現われるというだけのことである。「現われる」のは、商品生産者であって、商品経済そのものではない。

つぎに、「**恰かも資本主義以前の商品の如き観を呈するのである**」とあるが、いったい、この「……の如き観を呈する」ものは、なにか？　その前にある名詞として考えられるのは、「商品経済」と「市場関係」との二つであるが、いづれも「商品の如き観を呈する」ものなどではけっしてありえない。つまり、ここには主語のない迷文が並べられているわけである。ところで、この主語のないわば首なし胴体だけの述語につづいて、「**その場合には商品経済を動かす動力とでも云うべきものまで捨象されざるを得ないことになる**」という主張がかかげられている。いったい、この「この場合」とは、どういう場合なのか？　もし、「商品経済をその社会的基礎から抽象してしまった」場合だと云うのであれば、「社会的基礎」なしの商品経済が「動く」こともできなければ「動かされる」こともできない、まったくの形骸にすぎないことは、自明ではないか。そもそも「商品経済を動かす動力」とは『単純なる市場関係』を動かす動力」などといったことではありえない。はじめにその「社会的基礎」すなわち「商品生産関係にもとづく社会的経済関係」を捨象しておいて、いまさら「その場合には」その「商品生産関係にもとづく社会的経済関係」すなわち商品経済を動かす動力「とでも云うべきものまで捨象されざるをえない」などと力んでみたところで、ただ間の抜けたくりかえしとしてしか聞えない。ところが、つぎの言葉がまた傑作である、――曰く「勿論、此の動力自身は商品形態そのものに之を求めることは出来ない」と。ごらんのように、この論者のいつも用いる手である「自身」と「そのもの」という言葉が並んでいる。この二つの言葉をつかっているところが、いわゆるミソである。「動力自身」は、要するに「動力そのもの」であって、これが「商品形態そのもの」と直接結びつかないものであることは、「動力」という文字と「商品形態」という文字とがまったく無関係なものであるのとまったく同じである。だが、このようにいくら「動力自身」と「商品形態そのもの」とを文字の上で無関係だと云い立ててみたところで、

なんの足しにもならない。いや、なんの足しにならないばかりか、当の論者が、「動力」および「商品形態」という二つの重要な言葉について、ただ全く表面的な屁理窟をこねるばかりで、肝腎の内容を理解することができないということを端的に示すだけのものとなっている。私的所有のもとで労働生産物が「商品形態」を採って私的に交換されることによって、この私的所有にもとづく商品経済そのものはしだいに発展せざるをえなくなる、つまり、労働生産物が商品形態をとることのうちに、すでに商品経済自身が必然的に変化＝発展をとげるべき「動力」がふくまれているのである。「商品経済を動かす動力」は、労働生産物の商品形態そのもののうちに、いいかえれば労働生産物が私的に交換されることそのこと自体の中にすでにふくまれている。要するに、「商品形態」という言葉の中に、「商品生産関係」と「労働生産物の必然的形態」との結びつきを看取できないで、ただ、商品という物的形式にのみ眼の眩んでいる論者にとっては、このような労働生産物の商品形態そのものが商品生産関係を推しすすめ変化＝発展させないではおかないという、商品生産そのものの必然的発展が完全に見失われてしまっているのである。

それゆえ、右につづいての「**しかし斯かる動力を捨象された商品形態は、如何なる社会形態にも外的なものとしてあるのであつて、実は古代、中世の商品にも具体的には適合しない完全に観念的抽象と云わなければならない**」という、この論者の主張自身が「完全に観念的タワ言」でしかないことは、明白であるといわなければならない。第一に、「斯かる動力を捨象された商品形態」という言葉そのものが、右に述べたように商品生産そのものの必然的発展を見失った「完全に観念的なタワ言」である。第二に、現実に「如何なる社会形態にも外的なるものとしてある」ような労働生産物の商品形態などというものは、あるものではない。労働生産物の商品形態は、つねに商品生産関係すなわち私的所有にもとづかざるをえず、したがって、労働生産物が商品形態を採るということは、私的所有という社

会的関係が当該社会の中に――つまり外部にではなく――存在することの動かしがたい証左である。第三に、「斯かる動力を捨象された商品形態」などというものはわずかにこの論者の観念の中にのみ存在しうるようなものでしかないから、「実は古代、中世の商品にも、どこの商品にも完全に適合しない」のは当りまえであって、「いかなる社会形態にも外的なるものとして」であれ「内的なるものとしてであれ」完全に存在しえない、ただの観念的創造物にすぎないのである。

ところで、右の引用箇所から、「**商品経済の社会的基礎**」、「**生産の基礎と離れて考えられたもの**」、「**その生産的基礎**」、「**斯かる基礎**」という、たった四つの言葉をひきぬいてきて、並べて見ていただきたい。さすれば読者諸君は、「商品経済」したがってまた「労働生産物の商品形態」が必らず「その社会的基礎」「生産的基礎」と結びついたものであり、この「社会的基礎」によって制約されたものであり、また同時に、「商品形態」そのものがこの「社会的基礎」の維持＝再生産をはじめて可能にしていること、いいかえれば「その社会的基礎」の上での法則としての「商品経済」および「商品形態」ということを正しく理解することができるであろう。ところが、この論者は、右のように各種の「基礎」をあれこれ並べたてながら、ついに、この「基礎」そのものがいかなるものであるかを説明することなく、たゞ言葉として「基礎」そのものをくりかえして終っているのである。

たとえば、「**古代、中世の商品と雖もそれが多かれ少かれ継続的に、繰り返して市場に提供せられる為には、その生産的基礎によって規定せられざるをえない**」という文章を見られるがよい。「多かれ少かれ継続的に繰り返して市場に提供せられる」ということでは、とうてい商品経済というわけにはいかない。労働生産物が必然的に商品形態をとること、いいかえれば、商品形態によってはじめて再生産が可能かつ必然的となる経済であってはじめて商品経済

といえるし、また、このような商品生産関係と結びついたもの、これの必然的現象形態としての商品でなければ、経済学の考察の対象とはなりえない。この点は、古代、中世の商品でも同じである。ところで、この論者は「その生産的基礎によって規定せられざるを得ない」と断定している。では、「その生産的基礎」とは、いったい、なにか？この論者は、あきれたことに、この当然の課題をすっぽかしてしまうばかりでなく、それにつづいて、今度は右の断定とまるであべこべの断定を平然とかかげるのである、――曰く、「**所謂単純商品と云われる場合にも、それは斯かる基礎から抽象したものであって、決して具体的には考察されて居ないのである。**」

この論者によって「古代、中世の商品」が「単純なる商品」と呼ばれていたことは、未だわれわれの記憶に新しいところである。さきの断定では、「単純なる商品」は、「この生産的基礎によって規定せられざるをえない」とあり、ここの断定では、その同じ「単純なる商品」は、「かかる基礎から抽象したものである」とある。なんと、この論者の断定の変通自在であることか！　ここに付けられた「決して具体的には考察されて居ないのである」という説明のごときは、ただたんに、この論者のいつもながらの論理的思考能力の缺除を示すだけのものである。そもそも「単純なる商品」という場合に、「古代、中世」の具体的諸条件を考慮に入れて、労働生産物を具体的に考察するなどということが、問題となるであろうか？

最後の「**商品形態自身は、元来生産とは分離した、云わば之に外的に与えられるものとしての性質を有している**」という断定も、さきの、「生産的基礎によって規定せられざるをえない」という断定と、直接かつ完全に撞着する。こうした完全に矛盾し撞着したあれこれの断定を並べたてることができるのは、要するに、「生産的基礎」が何であるかということがさっぱり判らないでただ言葉として「生産的基礎」そのものを挙げることしかできないこと、商品

形態という言葉からは、商品の形という意味しか汲みとることができないこと、――この二つの具体的「基礎」の上にのみはじめて可能となるものである。

では、資本主義社会の「抽象的なる商品」とは、いったい、いかなるものであるか、その「独自性」はどこに見出されるか？　――この点について、この論者は、きわめて詳細に説明を展開しているので、まずその箇所を引用してかかげ、つぎにその論理的および国語的性格のほどを重点的に吟味してみなければならない。

〔引用第三〕

「しかし乍ら又商品経済を真にその生産的基礎に於いて理解しようとすれば、己に前にも述べたように商品経済が一社会の支配的形態となる資本主義社会を採って、之を分析する外ないのである。此の場合にも吾々は、資本主義社会を一挙に説明するわけにはゆかない。複雑な現実的関係を分析して単純なる関係に抽象したものから出発しなければならない。マルクスが『資本論』を第一章商品から始めたのも全く斯かる方法を示すものである。それが商品であって、財貨や生産物でないという理由は、己に前に述べたところであるが、しかしなお問題は今一つ残って居る。此の最初に採った商品は、資本家的商品を採ったにしても、それは現実の資本家的関係をそのまま採った、例えば第三巻にあらわれるが如き商品ではない。それは当然に斯かる資本家的関係を捨象した抽象的なものであるが、此の場合の抽象的なる商品は如何なる性質を有するかということを考えて置かなければならない。

それは勿論所謂単純なる商品の如き具体性を有するものではない。実際又単純なる商品は先きにも述べたように、決して資本家的商品の如き全面的な交換関係を有するものでもなければ、又生産自身を社会的に商品生産として規制するものでもない。したがって資本家的商品から商品自身の規定だけを抽出したとしても、それは決して資本家的生産以前の所謂単純なる商品となるわけではない。歴史的には依然として資本家的生産関係に規定せられた商品であって、単にその資本家的関係から抽象され、或いは又進んで貨幣形態自身からも抽象されたものに過ぎない。したがって又有らゆる社会形態からも遊離したというような商品形態ではなく、寧ろ資本主義的生産関係の中心基軸とでも云うべきものを純粋に表現するものとしてあるわけである。

しかし斯かる抽象を受けると同時に商品は、それが如何なる産業部門で、如何なる事情の下に生産せられたかという具体的関係、殊に資本家同士の関係は当然に捨象されて来る。それは又更に同様にして貨幣形態自身をも捨象し得るのである。それと同時に有

らゆる資本家的商品に共通な規定を有するに過ぎないものとなって来る。恰かも資本家社会の全商品を打って一丸となしたような商品として現われる。実際又資本家的商品にしても個々の商品を取って見るとそれが如何なる資本家的関係の下に生産せられたかは、それ自身には明らかにされ得ないようなものとならざるを得ないのであって、唯一個の商品を取ればそれは貨幣形態自身をも捨象されざるを得ないのである。しかし斯かる抽象過程は決して単純に形式的な抽象でもなければ、更に又歴史的に発生期の商品と之を同一視することも出来ない。

単純な形式的抽象でないというのは、斯くの如き抽象を受けた商品自身も他の商品との関係を拡大するに従って、漸次に具体的な関係を展開せざるを得ないものを、最も簡単なる関係に於いてもなお保有して居るという点に残して居るからである。斯かる抽象作用は、その極限に於いても商品を生産物そのものに、或いは又財貨そのものには抽象することは出来ない。商品を生産物そのものに抽象する抽象は、最早や再び商品として資本家的商品まで発展し得るものとは云えない。云い換えれば斯かる形式的抽象の結果としての単純なる概念は、その発展も外部から規定を加えられるに過ぎないものとならざるを得ない。それと同時に此等の規定は、商品自身の必然的に展開するものとしてではなく、単に便宜的に、或いは偶然的に加えられるものとならざるを得ないであろう。

又歴史的に単純なる商品と同一のものではないというのは、単純なる商品が己に前にも述べたように、それ自身に資本家的商品への発展の動因を有するものではないという点でも明らかであろう。勿論、斯かる抽象的形態の商品はその背後に資本家的生産関係を有するものであって、此の商品自身に資本家的生産関係を認め得るものでもなければ、更に貨幣形態さえもそれ自身には与えられて居ないものとなって来るのであって、所謂単純なる商品、或は又更に進んで物々交換に於ける生産物の如く交換によって始めて商品となり、而も交換されると己に商品ではなくなるというような瞬間的商品にさえ類似したものとも云える。したがって又『資本論』第一巻の最初の最も簡単なる商品は、資本家的社会の無数の商品から一個の商品を採って来たものとして、同時に又商品の歴史の発生期に見られるものと共通な点を有するものとならざるを得ない。それは所謂単純なる商品の性質をも始めて明確にし得る抽象的規定を有するものではあるが、決してそれ自身斯かる単純なる商品としてあるのではない」（前出、二二―二五ページ）。

みられるようにこの論者の文章は、読者がその全体にわたって大意をつかみうるような代物ではなく、どうしてもその全文章のひとつひとつの論理的ならび国語的意味を吟味し、それらがいかに甚しい論理的ならびに国語的錯乱を

あえておかしつつ、しかもそれら相互の間においてまた矛盾撞着し、支離滅裂の状態にあるかということを具体的に理解することが絶対に必要である。そこで、われわれは、さきの場合にならって、その最初のパラグラフから、これを構成する各文章について見てゆくほかないが、これまでの検討によってすでに大体の要領を心得ているわれわれとしては、これまでの検討の成果を考慮にいれて、できるだけ簡単明瞭にこの吟味をしとげることができるし、また簡潔に事を運ぶことが適切と思われる。

まず、**第一パラグラフ**について。

①「**しかし乍ら又商品経済を真にその生産的基礎に於いて理解しようとすれば、已に前に述べたように商品経済が一社会の支配的形態となる資本主義社会を採って、之を分析する外ないのであるが、此の場合にも吾々は、資本主義社会を一挙に説明するわけにはゆかない。複雑な現実的関係を分析して単純な関係に抽象したものから出発しなければならない。**」――「商品経済」とはなにか、といえば、それは「労働生産物が商品として生産され交換される社会的経済関係」のことである。だから、そもそも、「商品経済を真にその生産的基礎に於いて理解しようとすれば」などというのは、無意味な蛇足でもあり、また厳密にいえば真に誤りである。「生産的基礎に於いて理解し」なければ商品経済についてはなにひとつ知ることはできぬ。ところで、この「生産的基礎」は、もちろん、「生産関係」すなわち「私的所有とこれに結びついた自然発生的な社会的分業」でなければならぬ。ところが、のちに見られるように、この論者がこのように「生産的基礎を」理解するのでなく、「生産的基礎に於いて」理解することを主張しているのは、この「生産的基礎」を「生産過程」にすりかえ、「生産過程が商品形態をとるところの資本主義社会」という、これまた、きわめて独特の論理的ならびに国語的性格をもつ『術語』をひねりだすことによってその誤った資本主義

の規定を合理化せんがための伏線をここに置いているものであって、軽々にこれを見逃すことのできるものではない。だが、この種の『術語』については、いづれゆっくりお目にかかるときがあるであろう。

ところで、さきに〔引用第一〕において、この論者が「商品経済」を「一〇〇パーセント商品交換社会」となしていたことは、未だわれわれの記憶に新しい。この『規定』をここにあてはめれば「商品経済が一社会の支配的形態となる資本主義社会」という言葉は、「一〇〇パーセント商品交換社会が一社会の支配約形態となる資本主義社会」という言葉になり、まったく無意味なくりかえしであることがわかる。これによって、ただちに知られるのは、「商品経済が一社会の支配的形態となる」という文句のあやしげなことである。いったい、支配的形態とは、どういう「形態」について云っているのか？　では、「非支配的」もしくは「被支配的」形態とは、どんな形態なのか？　「商品経済」などという「形態」に直接かかわりのない通俗的かつあいまいな言葉をもってきて、「支配的形態」などと云ってみたところで、出てくるのは、要するに非「商品経済」すなわち「現物経済」にたいして「商品経済」が「支配的」になるということぐらいであって、このようにまだ「現物経済」が残っており、「商品経済」が一〇〇パーセントではなく、たんに「支配的」な地位を占めるだけでは、とても資本主義社会などといえたものではない。封建社会でも――ことにその末期においては――りっぱに「商品経済が支配的」となっているのである。ここのくだりは、さきに見たように、『資本論』冒頭の「資本制的生産様式が支配的におこなわれる資本主義社会」という言葉の、例によって例のごとき、錯乱した焼き直しにすぎないことは、明らかである。だが、まだ重要問題がほかにもいくらもある。いったい、「之を分析する」というときの、「之」とはなにか？　論理的にいえば、それは当然に「商品経済」でなければならぬが、しかし、いま問題になっているのは、「商品経済を真にその生産的基礎に於いて理解」することであって、

一般に「分析」することではない。これはまことに奇妙な重複語である。またもし、この「之」が「資本主義社会」であるというのであれば、これはまた完全なすりかえである。ごらんのように、「商品経済の理解」は「資本主義社会の分析」におきかえられてしまうが、この論理的詐術の内容は、そのつぎの「一挙に説明するわけにゆかない」という文句と結びつけて見るとき、きわめてはっきりしたものとなる。つまりこうである。はじめに課題として出されているのは、(イ)「商品形態自身をその生産的基礎と完全に結びつけて理解すること」(前出、二〇—二二ページ)である。ところが、この論者は「商品形態」を「商品経済」に横すべりさせ、「商品経済が支配的形態となっているのは資本主義社会である」からという理窟で、右の課題の解決のためには、(ロ)「資本主義社会を採って、之を分析するほかない」と主張し、ついで、(ハ)「資本主義社会を分析するには」「資本主義社会を一挙に説明するわけにはゆかない」と述べ、だから、(ニ)「商品の分析から、出発しなければならない」ということで、落ちになる。つまり「商品形態を分析する」ためには「商品の分析から出発しなければならぬ」という、まことに目覚ましいタワ言であることが、あらわになる。

②「マルクスが『資本論』を第一章商品から始めたのも全く斯かる方法を示すものである。」——「斯かる方法」とこの論者が呼んでいるのは、「商品形態を分析するためには商品の分析から出発しなければならぬ」という、ノンセンスなくりかえしであって、つまり、この論者特有の論理的錯乱の方法のことである。それがマルクスの「方法」とまったく無縁なものであることは、いわずしてあきらかである。マルクスの場合には、商品形態の「生産的基礎」を明確に把握していたからこそ、資本主義社会の経済学的分析に当って、まず商品の分析から出発したものである。それが「商品形態を生産的基礎において理解するために、商品の分析から出発する」などという「方法」と、どこに共

通のものがあろうか。

③「それが商品であって、財貨や生産物でないという理由は、已に前に述べたところであるが、しかしなお問題は今一つ残って居る。此の最初に採った商品は、資本家的商品を採ったにしても、それは現実の資本家的関係をそのまま採った、例えば第三巻にあらわれるが如き商品ではない。それは当然に斯かる資本家的関係を捨象した抽象的なものであるが、此の場合の抽象的なる商品は如何なる性質を有するかということを考えて置かなければならない。」――

まず、冒頭の「それ」という言葉に注目されたい。「それ」は指示代名詞であって、前文の名詞または代名詞を指示したものにほかならない。ところで、前文にある名詞または代名詞として、之に該当し得るものと考えられるのは、「商品」と「方法」しかない。この二つの言葉を「それ」におきかえてみるがいい。国語的にみてすら、ノンセンスなものであることがわかる。論理の展開は、多数の文章を論理一貫的に積み重ねることによってはじめて可能となるものであるが、この論者のこうした非論理的、非国語的「積み重ね」は、たとえいくらあれこれマルクス的、ヘーゲル的『用語』を濫発しようと、要するに論理的錯乱を露呈するだけのものである。この「それ」は、あきらかに誤りであって、「『資本論』がその出発点としたもの、その『始原』に据えたもの」と明記されねばならぬ。ところで、『資本論』の『始原』が「商品であって財貨や生産物でないという理由」についてこの論者が「已に前に述べたところ」はわれわれによってすでに検討ずみであり、それがまったく誤解と錯乱にもとづく『理由づけ』でしかないこともすでにあきらかにされたところである。そこで、この論者が「今一つ残って居る」という「問題」についての説明をみてみよう。

「今一つ残っている問題」とは、『資本論』の冒頭におかれた、右の『始原』をなす「商品」、「抽象的なる商品」

は「如何なる性質を有するか」ということであるそうである。ところで、前稿においても、また本稿の前半においても、すでに引用したところによってあきらかなように、そもそもの当初から当面の問題は、『資本論』冒頭の商品は「単純なる商品」か「抽象的なる商品」か、なぜそれは「単純なる商品」ではなくして「抽象的なる商品」と規定しなくてはならないのか？　ということであったのである。そして、この当面の問題を、論者独特の論理的および国語的操作を用いて、いかに論者のあらかじめ用意した解決方向に引き入れてその特異な結論を「合理化」しようとしているかということを、これまで長々と見て来たわけである。そして、同じこの第一パラグラフのはじめに「生産的基礎」なる言葉が飛び出して来てノンセンスなくりかえしが展開され、愚劣な落ちになったのも、すべては右の当面する根本問題の解決のためのひとつの手だてにほかならなかったはずである。ところが、ここに至って、またぞろ、『資本論』冒頭の商品は、何故「抽象的なる商品」として規定されねばならないか、「抽象的なる商品とはいかなる性質を有するものか」という「問題」が、「今一つ残る問題」として出て来るのである。なんとあきれはてた『理論家』的論法ではあるまいか！

右のように本来なにを問題としているか、その本来の問題を解決するためにいかなる順序で、どのように説明すべきかということは、正常な論理的ならびに国語的思考能力を最小必要限度具えた者にしてはじめて問題とし得るところであって、この論者が右のような問題そのものを見失い、なんのためになにを論じているのか判らないような態たらくになるのは、これまでの吟味の結果に照して、むしろ必然というべきなのである。このことは、いまとりあげている文章についてもあきらかに看取されるところである。たとえば、この論者は、「第三巻にあらわれるが如き商品」は「現実の資本家的関係をそのまゝに採った商品」だ、としている。この傍点をつけた句をとくとごらんいただきた

い。いったい、「現実の資本家的関係をそのままに採った」とは、どういうことであるか？　第一に、商品が「関係を採る」ということは、国語としても成り立たない全くのノンセンスである。第二に、「現実の資本家的関係」という言葉の「現実の」とはどういうことか？　「資本家的関係」は観念の中に在るのではなくて、客観的に現実に在るものであって、いまさら「現実の」という形容詞を必要としない。では、これをこの論者のお好みの「具体的な」という意味と同じものとしてみよう。そのときには、「ある具体的な資本家的関係をそのまま採った商品」などという言葉が成り立たないこと、また、「第三巻の商品」はけっしてある「具体的な資本家的関係をそのまま」あらわしたものではないことは、あきらかである。要するに、ここでの「そのままに採った」という言葉はまことに紛らわしい謳い文句であって、これは簡単に「あらわすものとしての」ということだけで充分なところである。ところで、「現実の資本家的関係をあらわすものとしての商品」ということであれば、第三巻の商品には限らない。すでに第一巻第三篇に出てくる商品、したがって、第一巻の大半および第二巻全部に出てくる商品でもりっぱにそうである。したがって、そのつぎの文章で、「当然に斯かる資本家的関係」という言葉が出て来たところで、この「斯かる」は、これまた紛らわしい謳い文句でしかないことがわかる。こういう謳い文句をくりかえし濫発して文章をつくり上げうるところに、そもそも論理的および国語的乱錯の端的な露呈があるのである。この論者がさまざまのマルクス的表現をつかいながら、その意味をまったく理解できないでいるということは、この「問題」そのものの提起の仕方の中にもあらわれている、というのは、「抽象的なる商品」とは、この論者の言葉どおり、「資本家的関係を捨象した抽象的なもの」なのであるから、改めて「抽象的なる商品は、いかなる性質を有するか」などというように問題を定式化することは、見当はずれでもあり、まったく非論理的である。この場合、問題は、当然に、「資本家的関係を捨象したもの」

という規定をそのままとりあげ、その内容を究明すべきなのであって、この「資本家的関係を捨象したもの」という規定を論理的に正しく追究して行くことによって、「抽象的なる商品」の本質規定は正しく明確にされうるものである。ところが、この論者は、自分でつかっている言葉の論理的意味が皆目わからず、折角の規定をそのままほっぽり出して、まったく別の方向に問題をひきのばし、したがって、ここにますます論理的ならびに国語的錯乱を重ねざるをえない仕儀となっているのである。

右の問題、すなわち、「抽象的なる商品はいかなる性質を有するか？」にたいする論者の解答は、第二パラグラフ以下で展開されるが、まず、**第二パラグラフ**からみていくことにしよう。

①「**それは勿論所謂単純なる商品の如き具体性を有するものではない**。」――この文章はまったく奇抜なものであって、その比類なき錯乱ぶりは、単純なる商品は具体性を有するが抽象的なる商品はそういう具体性をもたぬ、というように、「具体性」という言葉の無軌道的使用にあらわれている。いったい、「具体性を有する」とは、どういうことか、いや、この言葉はどういうことを意味しうるというのか？　この論者は、「勿論」などという副詞句をことさらつけているが、右のような言葉を並べることができるというだけで当の論者は「勿論」論理的思考能力の全き缺除を自ら証明している。この「具体性を有する」ということがもし「現実の具体的関係をそのままあらわしたもの」という意味であるならば、「単純なる商品」がかかる「具体性を有するもの」でありえないことは、あまりにも明瞭である。なぜならば、「単純なる商品」が存在するのは、資本主義以前の諸社会であり、したがってそこには当然に前資本主義的生産諸関係が支配的に存在し、そのもとでのみ生産されえた商品は、必然的に具体的にはそういう現実的諸関係と結びついたものでなければならないからであり、しかも、これらの具体的諸関係をあらわすものである

かぎり、それは「単純なる商品」ではありえないからである。これらの具体的諸関係のもとで生産された商品をなおかつ「単純なる商品」として、「封建的な商品」等々と呼ばないのは、要するにこれらの具体的諸関係を捨象して、たんに私的所有という生産関係のもとでのみ生産された商品としてのみ、これを見るからであり、またこの私的所有という商品生産関係をあらわすものとして、その必然的形態規定として「単純なる商品」を考察せんがためである。この点は、資本主義社会の商品について、その資本制的生産関係を捨象してたんに私的所有という商品生産関係の物的表現として、その必然的な形態規定として「抽象的なる商品」を考察するのとまったく同じであって、厳密に論理的にみて「単純なる」と「抽象的なる」との二つの言葉がまったく同じ意味を有するのと同様に、理論的にみて「単純なる商品」と「抽象的なる商品」とは、まったく同じ規定をもった商品であることは、あきらかである。もし、資本主義以前の「単純なる商品」が「具体性を有する」というのならば、資本主義の「抽象的なる商品」も同じ「具体性を有する」というのでなければ、まったく論理的に一貫しないものといわざるをえない。しかも、この論者は、すでに見たように、「単純なる商品そのものが一種の抽象的存在の如きものとなって居る」というような言葉を得々としてかかげているのである。いったい、「具体性を有するもの」ということは、「一種の抽象的存在の如きもの」ということなのか！　こういう論者が、「抽象的」「具体的」という、基本的な概念についてまったく混乱した誤解しかもっていないことは、およそあきらかではあるまいか。

②「**実際又は単純なる商品は先きにも述べたように、決して資本家的商品の如き全面的な交換関係を有するものでもなければ、又生産自身を社会的に商品生産として規制するものでもない。**」――まず、「資本家的商品の如き全面的な交換関係を有するもの」というくだりに注意されたい。いったい、ここで問題としているのは、第一パラグラフで

明示された「資本家的関係を捨象した、抽象的なる商品」なのか、それとも「資本家的関係を捨象しない、資本家的商品」なのか？　もしそれが、「資本家的関係を捨象しない、資本家的商品」であるというならば、それが資本主義以前の「単純なる商品」とちがうものだということは、はじめから自明のことであって、いまさらことごとしく論ずるまでもない。また、その場合には、「全面的交換関係」などということで、「資本家的」という規定を説明することは、まったく見当ちがいである。またもし、ここでの主題が「資本家的関係を捨象した、抽象的なる商品」であるならば、「全面的な交換関係を有するもの」ということは全く当らない。「抽象的な商品」は「交換関係」という規定をもつものではあるが、「全面的な交換関係」という規定をもつものではけっしてない。このことは、この第二パラグラフおよびのちに見られる第三パラグラフの中での、「貨幣形態自身からも抽象されたもの」、「それは貨幣形態自身をも捨象されざるを得ないのである」という、論者自身の確言によっても示されている。「貨幣形態」を捨象するということは、「全面的な交換関係」を捨象するということ、たんなる「交換関係」を前提とするということにほかならない。

つぎに、「生産自身を社会的に商品生産として規制するものでもない」という言葉も、完全な錯乱とデタラメだけを示すものである。第一に、この論者には、商品とはたんなる物的形態でなくて、私的所有と社会的分業という一定の社会的生産関係の必然的な物的表現にすぎないということが、どうしてもわからないのである。第二に、商品は、したがって相互に労働生産物を私的に交換することなしには、生産者の生存＝再生産が不可能になることを示すものだということが、さっぱりわからないのである。だから、「社会的に」などいう全く愚かしい謳い文句が出てくる。いったい、商品したがってまた商品生産において、「社会的」でないことが問題となりうるであろうか？　この「社

会的に」という言葉は、この論者のつもりでは、おそらく例によって、「全社会の生産が一〇〇パーセント商品生産になる」という意味で用いられているものであろう。だが、それにしても、この「一〇〇パーセント商品交換社会」という規定が「抽象的なる商品」そのものの規定にとって直接になんらの意味をもちえないことは、あきらかである。総労働生産物の一〇パーセントが自家消費されても、りっぱに資本家的社会は成り立ち、「抽象的なる商品」は存在しうるし、また事実存在している。「単純なる商品が、生産自身を社会的に商品生産として規制するものでない」などという言葉の迷妄性は、この論者が挙げている「中世都市」についてみても、また封建制末期の社会についてみても、うたがう余地はない。

③「したがって資本家的商品から商品自身の規定だけを抽出したとしても、それは決して資本家的生産以前の所謂単純なる商品となるわけではない。」――この文章は、この論者の特異な論理的思考方法を示すものとして少なからず参考になるものである。まず、「資本家的商品から商品自身の規定だけを抽出した」ものということは、さきに挙げた「資本家的関係を捨象した、たんなる商品そのもの、つまり、抽象的なる商品」として考察したものということである。ところで、「前資本主義的社会の商品から、つまり前資本家的商品から前資本主義的関係を捨象して、商品自身の規定だけを抽出したもの」が、ほかならぬ「単純なる商品」である。だから、「抽象的な商品」も、「単純なる商品」も、どちらも、同じく商品生産関係以外の諸関係を捨象した「たんなる商品そのものとしての規定だけを抽出したもの」をあらわすものでなければならず、したがって、まったく同じ規定をもつ商品そのものとして取り上げなければならず、また、同じ規定をもつたんなる商品として取り上げることができなければならぬ。ところが、この論者は、「抽象的なる商品」については、「資本家的関係を捨象した」ものとしながら、「単純なる商品」につ

いては、――この争う余地のない「単純なる」という規定がなんのために附いているかわけわからずに、――最後まで、「資本家的生産以前の」という規定を捨象すること、つまり「前資本主義的関係を捨象する」ことがまったくできないのである。要するに、錯乱した先入主が、正常な論理的思考過程を勝手きままにふみにじって主張されるということの典型的な一例がここにはしなくも示されているのである。

④「**歴史的には依然として資本家的生産関係に規定せられた商品であって、単にその資本家的関係から抽象され、或いは又進んで貨幣形態自身からも抽象されたものに過ぎない。したがって又有らゆる社会形態からも遊離したというような商品形態ではなく寧ろ資本主義的生産関係の中心基軸とでも云うべきものを純粋に表示するものとしてあるわけである。**」――ここの箇所は③とならんで、この論者の論理的思考方法の性格を示す絶好の範例をなすものである。まず、「単に」とか「に過ぎない」とかいうおよそ無意味な謳い文句に注意されたい。この論者は、こういう言葉をくりかえして並べて、本文の意味を減殺しようとしているのであるが、そのことによってかえって論者自身が本文の意味の重大性に全く気づかないことを暴露するものとなっている。なによりも、この論者は「資本家的関係から捨象され、さらにすすんで貨幣形態自身からも抽象されたもの」として「商品」というものの意義がさっぱりわかっていないのである。たんに言葉そのものについてみただけでも、「資本家的関係から抽象されたもの」が、「寧ろ資本主義的生産関係の中心基軸とでも云うべきものを純粋に表示するものとしてある」などという主張は、純粋な自家撞着であり、純然たるタワ言にすぎない。また、同じく「有らゆる社会形態からも遊離したというような商品形態」という言葉そのものにしても、これまた、まったくのタワ言にすぎない。いったい、商品という形をとった労働生産物が、あらゆる社会形態から「遊離する」というのは、どういうことか？　「あらゆる社会から遊離する」ことなど商品に

できるわけもなく、また、いったい、特定の社会を離れてそもそも商品が成り立ちうるか？　こういうタワ言を並べて、だから、「商品は社会形態から遊離できない。抽象的なる商品は、資本主義的生産関係の中心基軸を純粋に表示するものなのだ」などという論法を操るのは、まったく、タワ言を根拠としてさらに輪をかけたタワ言を主張するようなものである。問題は、「抽象的なる商品」の規定そのものにあるのであって、その内容を論理的に正しく確立することにある。商品が遊離するか否かなどというようなことは、まったく問題にならぬ。「抽象的なる商品」が「資本主義的生産関係の中心基軸とでもいうべきものを純粋に表示するものとしてある」というような主張は、論理的にみてまったく規定のなんたるかを知らぬタワ言というのほかない。ところが、これらのタワ言を抽き出すために、冒頭に、「歴史的には依然として資本家的生産関係に規定せられた商品」だという文句がことさら仕組まれているのである。そもそも資本主義社会というのは歴史的社会であって、商品そのものがひとつの歴史的産物であること、その歴史的な資本主義社会の歴史的な商品をわれわれがとり上げねばならないことは、はじめからわかりきったことである。この歴史的に規定された商品を、はじめにまず「抽象的な商品」として、すなわち、「資本家的関係によって規定せられた性質を捨象して」考察するのである。歴史的に規定されたということと、論理的に規定されたということでは、天と地ほどのちがいがある。これを美事に混同し、またことさらすりかえていて、どこに「規定」が問題となりうるか。

ところで、右のような純然たる論理的錯乱をあえて犯してまで、この論者が何故にことさらここで「資本主義的生産関係の中心基軸とでも云うべきものを純粋に表示するもの」というような言葉をかかげたかといえば、それは、この論者が、「資本主義社会の基本的社会関係自身が商品形態を有している」（前出、五ページ）とか、「資本主義社会の基本

的社会関係が商品形態を採る」（前出、三四ページ）とかいうような、まことに奇抜な、錯倒した観念をはじめから抱いて、この観念に結びつけることなしには、総じて「商品形態」そのものを考えることができなくなっているからである。この錯倒した観念については、すでにさきにもふれるところがあったが、この観念そのものは、第一に、「資本主義社会の基本的社会関係」すなわち「資本主義的生産関係」がいかなるものであるかということを全く理解できないことを示し、第二に、商品形態とは経済的な形態規定にほかならず、私的所有という生産関係の必然的な物的表現にほかならないことを正しくとらえることができないことを示し、かくして、第三に、右の言葉そのものは、「資本制的私的所有という基本的生産関係自身は、私的所有の物的表現としての商品形態をとる」といったような、純然たる錯倒したトウトロギーを示すだけのものだ、ということが論理的に自覚されないような論理的思考能力の缺除を示すものとして、この論者のいっさいの『理論的』主張の「中心基軸とでも云うべきものを純粋に表示するものとしてある」ものといわねばならない。

「抽象的なる商品」そのものについての説明は、つぎの**第三パラグラフ**でも、積極的に展開されている。

①「しかし斯かる抽象を受けると同時に商品は、それが如何なる産業部門で、如何なる事情の下に生産せられたかという具体的関係、殊に資本家同士の関係は当然に捨象されて来る。」――この「抽象を受けると同時に」という、副詞句に注意されたい。つまり、この論者においては、「資本家的関係を捨象した抽象的なもの」となるということと、「如何なる生産部門で、如何なる事情の下で生産されたかという具体的関係、殊に資本家同志の関係」が捨象されるということとは事柄そのものがちがっているのである。まず前者の「抽象を受ける」と、それと時を同じくして別の「抽象」、つまり、後者の「捨象」がおこなわれて来るのである。つまり、「資本家的関係を捨象する」とい

うことの意味、そしてまた総じて「抽象」とはどういうことかという基本的な事柄がさっぱり訳分らないのである。

②「**それは又更に同様にして貨幣形態自身をも捨象し得るのである。**」――「更に同様にして」というのは、まったく無意味なおしゃべりにすぎない。いったい、「資本家同志の関係」が捨象されるのと、「貨幣形態自身」が捨象されるのと、どうして「同様にして」ということができるか？　また、「捨象し得る」というのは、いったい、どういうことか？　論理的規定が問題となっているときには、「当然に捨象すべきである」といわねばならず、総じて捨象が正しいか否かが問題とならねばならぬ。「捨象し得る」ということは、同時に、「捨象されないこともあり得る」ということを当然にふくみ、したがって、当面「捨象的なる商品」の「抽象的」規定が問題となっているとき、まったくこの問題をごまかすことしか出来ないことを意味する。ところが、すぐつぎに見られるように、「資本家同志の関係が捨象される」場合などとはさらさら関係のない「打って一丸となしたような」などという、これまた全く見当はずれのおしゃべりによって、「唯一個の商品を取ればそれは貨幣形態自身をも捨象されざるを得ないのである」などという『結論』があらためて抽き出されているのである。ごらんのとおり、論理も国語も、そのすじみちなどあったものではないのである。

③「**それと同時に有らゆる資本家的商品に共通な規定を有するに過ぎないものとなって来る。恰かも資本家社会の全商品を打って一丸となしたような商品として現われる。実際又資本家的商品にしても個々の商品を取って見るとそれは如何なる資本家的関係の下に生産せられたか、それ自身には明かにされ得ないようなものとならざるを得ないのであって、唯一個の商品を取ればそれは貨幣形態自身をも捨象されざるを得ないのである。**」――ごらんのように、まずもってさきに「資本家的関係から抽象された商品」、「貨幣形態自身をも捨象した抽象的商品」が、なんと、「そ

れと同時に」――諸君、よく聞きたまえ、それと同時に、だ！　――「有らゆる資本家的商品に共通な規定を有するもの」、つまり「資本家的関係によって明確に規定されたものとしての資本家的商品」に過ぎないもの――諸君、またまたよく聞きたまえ、ただの「資本家的商品に過ぎないもの」、だ！――となって来る!!　この「資本家的」という規定を共通に有する「資本家商品」が、――なにも「個々の」でなくとも、「多数の」を取って見ても――「いかなる資本家的関係の下に生産せられたか」は、それ自身には「明らかにされ得ない」のは、あったりまえである。商品自身がどうして「それ自身に」意識をもちうることがあろうか!?　いまさら、「明らかにされ得ないようなものとならざるを得ない」などというシッポは、いたずらに論者「それ自身」の論理的不明確、甚しい場当り主義を示すだけである。ところで、この論者が論理的思考能力にまったく弱いということは、「いかなる資本家的関係の下に生産せられたかは、明らかにされ得ない」というときの、「明らかにされ得ない」ものはなんであるか？　が皆目わからないという点によく示されている。論理的にいうならば、「明らかにされ得ない」のは、「いかなる」資本家的関係の下に生産せられたかであって、「資本家的関係の下に生産せられた」ことは、問題なく明らかなのである。このことは、また「資本家的」という共通の規定をもった「資本家的商品」としては当然のことであって、総じて「資本家的関係の下に生産せられた」ことが明らかにされ得ないようなものが「資本家的商品」などといわれるようなものになりようはずがないのである。それゆえ、「唯一箇の商品を取ればそれは貨幣形態自身をも捨象されざるを得ないのである」などという『結論』は、まったく筋ちがいの、タワけた独断と判断されざるを得ないのである。この③において、いささか滑稽なのは、「全商品を打って一丸となしたような商品」というくだりである。「打って一丸となした」ところで、「資本家的商品に共通な規定」つまり、「資本家的」規定が消えてなくなるわけではない。また、いくら「打

って一丸となした」からといって、「一個の商品」となって貨幣はどこかへ消えてしまうというわけにはいかぬ。「打って一丸となした」のは「商品」であって、それでは貨幣形態はまだ「一丸」とはなり得ないのである。

④「**しかし斯かる抽象過程は決して単純に形式的な抽象でもなければ、更に又歴史的に発生期の商品と之を同一視することも出来ない。**」――これもまた、この論者特有の迷論の一例である。まず、「抽象過程」と「抽象」とが同じものだとされる。「単純な商品」と「歴史的に発生期の商品」とが「同一視」されている。「更に又」指示すべき名詞を指示しない指示代名詞――「之」――が用いられる。「同一視」ということの論理的意味などお構いなしに、ただ「同じ」ではないということがくり返される。論理的規定の内容を抜きにして「同じ」かどうかなどを論ずることはおよそノンセンスである。「更に又」論理的にみて、まったく自己暴露的なのは、「形式的な抽象」という言葉である。いったい、「形式的な」抽象というのは、いかなる抽象か？　そしてまた論者自身のいう「形式的」でない抽象というのは、いったい、どういう抽象か？　この論者は、「実質的」な抽象とでもいうものがあると云うのだろうか？　そもそも経済的形態規定が問題となっているとき、「抽象」はただ論理的にのみ行われるべきものであって、「単純に形式的な」などという規定をもった抽象はおよそ――言葉としても――問題とならぬ。ことに論理的錯乱と不可避的に結びつくところの一種の狭智を示しているのは、「歴史的に発生期の商品」という言葉である。「歴史的に発生期の」というような、特定の・具体的規定をもった「商品」を、はたして論者は「単純な商品」と「同一視」しているのであろうか？　この「……でもなければ、……も出来ない」というような文体は、右の狡智の貧相なことを示して、かえってわれわれの胸を打つものがあるくらいである。

ところで、右の「形式的な抽象」という、新発明語については、つぎの第四パラグラフを参照してみる必要があ

る。そこで、つぎに**第四パラグラフ**をとりあげよう。

①「**単純な形式的抽象でないというのは、斯くの如き抽象を受けた商品自身も他の商品との関係を拡大するに従って、漸次に具体的な関係を展開せざるを得ないものを、最も簡単なる関係においてもなお保有して居るという点に残して居るからである。**」――まず、「斯くの如き抽象を受けた商品」とは、いったい、どういう「抽象」を受けた商品か？　もしこの商品が「資本家的商品」であるならば、つまり「資本家社会の全商品を打って一丸となしたような商品」であるならば、「他の商品との関係を拡大するに従い」という言葉は意味をなさぬ。「資本家的商品」という規定された商品そのものがすでにその中に「他の商品との関係」を、しかもたんなる「拡大された」関係とか「具体的な関係」ではなく、特定の「資本家的な関係」をば――これからさきに改めて「展開」するどころか――すでにそれ自身保有しているのであって、その意味において「最も簡単なる関係に於いてもなお保有している」などという主張は、まったくの自家撞着である。またもし、右の商品をばさきの「唯一個の商品を取ればそれは貨幣形態自身をも捨象されざるを得ない」という「唯一箇の商品」であるとするならば、「唯一箇の商品」という「最も簡単な関係に於いても」すでに「漸次に具体的な関係に展開せざるを得ないものを」「保有している」ということは、同じくまったくの自家撞着となる。そもそも「漸次に具体的な関係を展開せざるを得ないもの」とはなにか？という肝賢の「もの」の説明をぬいて、いくら「保有して居る」などとくりかえしてみても、論理的に納得させうるようなことはとうていむつかしい。そしてまた、「商品自身」がそういう「もの」を「保有している」のだなどという主張自身、すでにこの論者が形態規定そのものがなんであるかを弁えていないことの、つまりたんに言葉そのものの形式的『抽象的』＝観念的ひねくり廻しのみを事としていることの、動かしがたい一証左である。

②「斯かる抽象作用は、その極限に於いても商品を生産物そのものに、或いは又財貨そのものには抽象することは出来ない。商品を生産物そのものに抽象する抽象は、最早や再び商品として資本家的商品まで発展し得るものとは云えない。」――この「商品を生産物そのものに抽象する」という言葉に注意されたい。いったい、なんのために、どうやって抽象するというのか？　この論者は、なんでもその属性を捨象して行くことが抽象であって、そういう抽象を「抽象作用」とか「抽象過程」とか呼んでいるのであるが、これは、まったくたんに「捨象のための捨象」ということであって、およそ無意味なものである。経済理論において抽象が問題となるのは、そしてまた抽象をおこなわねばならないのは、もっとも簡単な形態規定を抽き出さんがためであって、この点にこそ抽象の唯一の意義があるのである。だから、ここで、「抽象作用」が「その極限においても財貨そのものには抽象できない」などということは、その論者が経済理論における重要な「抽象」の意義についてまったくなんらの理解をもち合していないことの動かしがたい証左である。この完全な無理解は、「もはや再び商品として資本家的商品まで発展し得るものとは云えない」などという、まったく見当はづれの『理由づけ』にも端的に示されている。このばあい「資本家的商品」など持ち出す必要は毛頭ない。このような『理由づけ』は、この論者が「商品そのものが資本家的商品にまで自力で発展し得る」かのような錯覚を抱いていることを示すものであって、この点においても、この論者の頭の中で形態規定の意義がまったく見失われていることは歴然たるものがある。問題は生産物一般に抽象するか、商品に抽象するかである。それが商品であるならば、この商品から資本家的商品に「上向」することはもはや問題はないのである。生産物一般に抽象することが完全な誤りであるのは、それがもはや形態規定ではありえないこと、したがってなんらの生産関係の物的表現でもなくなり、総じて経済理論の対象としての意味を全く失ってしまうからである。

③「云い換えれば斯かる形式的抽象の結果としての単純なる概念は、その発展も外部から規定を加えられるに過ぎないものとならざるを得ない。それと同時に此等の規定は、商品自身の必然的に展開するものとしてではなく、単に便宜的に、或いは偶然的に加えられるものとならざるを得ないであろう。」――「斯かる形式的抽象の結果としての単純なる概念」とこの論者が名づけているものは、「生産物そのもの」、あるいは「財貨そのもの」である。これはなんらの経済学的概念でもなく、したがって当面経済学における「抽象的」、「単純なる」という言葉の意味が問題となっているとき、これを「単純なる概念」などと呼んでここに引き入れることは、まったく無用の混乱をひきおこすだけである。ところで、この論者によれば、この「生産物そのもの」「財貨そのもの」が「発展」をとげるのだそうである。「その発展」という単純な言葉によって、この論者が経済学的諸概念の間における「発展」関係についてなにひとつとして正しい理解を持ち合していないことは明瞭である。「財貨そのもの」が「商品」になることは、なんらの「発展」でもない。また、「その発展も外部から規定を加えられるにすぎないものとなる」という論者自身の主張によって、この論者が「発展」および「規定」という、一般的な単純な概念、つまり国語についてまったく歪められた考え方しかもっていないことが示されている。そもそも、「外部から規定を加える」とは、いったいどういうことか、また、「外部から規定を加える」ことと「発展」とは、どういう関係があるというのか？

ところで、われわれは「云い換えれば斯かる形式的抽象の結果としての単純なる概念」という言葉を、その正常な国語的意味において理解し、「云いかえれば」というのは、すく前において述べられていることを「云いかえれば」であるとし、したがって、「形式的抽象の結果」とは「抽象作用をその極限まで形式的におしすすめた結果」と受けとったのであるが、「それと同時に此等の規定は」という文句にはじまるつぎの文章を読むと、右の「単純なる概

念」とは、ほかでもない「単純なる商品」を指しているものであることがわかる。それでなければ、さきの「外部から規定を加えられる」という文句と、この第二の文章の「此等の規定は、商品自身の必然的に展開するもの……」という文句とが結びつきようがないのである。ごらんのように、これまでこの論者は、「資本家的商品」を終始一貫論じて来たものであって、「いわゆる単純なる商品」そのものについても、又、この「単純なる商品」を抽き出すべき「形式的抽象」についてなんらふれるところがなかったのである。ところが驚いたことに、ここで突如として「単純な商品」が出てくるのである。もし、さきの「単純なる概念」が「単純なる商品」であるならば、それは私的所有と必然的に結びついた正真正銘の形態規定であり、しかも、その「細胞形態」であって、「その発展も外部から規定を加えられたにすぎないものとならざるをえない」などという主張は、まったく見当はずれのタワ言となる。この論者が「規定」という「単純な概念」についていかに知ること少ないかは、さきには「外部から規定を加えられる」といいながら、つぎには「これらの規定は、商品自身の必然的に展開するものとしてでない」といって平然としているところにあらわれている。いったい、「商品の外部から加えられる」「これらの規定」が「商品自身によって展開されえない」などということはあったりまえではないか。しかも、狡いことに、この論者は「商品」にことさら「自身」という限定詞をつけている。商品という物そのものがいかなる規定をもそれ自身で展開しえられないのは、これまたあたりまえである。だが、このあたりまえのことをことさら並べたててなにか論を立てようなどという論者は、お気の毒なことに、商品は経済理論においては形態規定としてのみ意義をもつこと、したがってこれを生産関係の必然的な物的表現としてとらえず、たんに物としてとらえるのは経済理論のなんたるかを弁ええないことをいたずらに表明するだけだ、という自明のことを御存じないのである。

さて、最後の**第五パラグラフ**を見てみよう。

①「**又歴史的に単純なる商品と同一のものではないというのは、単純なる商品が已に前にも述べたように、それ自身に資本家的商品への発展の動因を有するものではないという点でも明らかであろう。**」――「已に前にも述べたように」というのは、本稿でさきにかかげた〔引用第二〕のはじめの二つの文章を指している。そこではじめからなんらの説明もなしに、ただ「この動力自身は商品形態そのものに之を求めることはできない」と独断的に宣告されているだけである。ただ注目に値するのは、そこでとりあげられたのは「歴史的な単純商品」ではなく「商品形態そのもの」だということである。ところで、ここでの文章の主語は例によって例のごとく明示されていないが、資本主義社会の「抽象的なる商品」であることはうたがいない。この「抽象的なる商品」は論者自身さきに明言しているように、「資本家的関係からも、貨幣形態自身からも抽象されたものにすぎない」のであって、まさしく、論者自身の云う「商品形態そのもの」にぴたりとあてはまるものである。さきに〔引用第二〕において「かかる動力をも捨象された商品形態は、いかなる社会形態にも外的なものとしてある」という言葉によって示されているように、さきの「商品形態そのもの」と同一視された「単純なる商品」は、文字どおり「歴史的」なものではなく、まさに「超歴史的」なものであったはずである。ところがここに来て「歴史的に単純なる商品」などという言葉が飛び出してくるのである。いったい「歴史的に単純なる商品」とはどういう商品なのか、それと「歴史的に」を削った「単純なる商品」とはいったいどこが、どうちがうというのか？　しかもきわめてずるいことに、このようにまず「歴史的に単純なる商品」と云っておきながら、すぐつぎには「歴史的に」という文字を削った限定なしの「単純なる商品」という言葉にすりかえているのである。ところで「すでにさきに述べたように」「商品形態そのもの」が「動力を捨象されたもの

にすぎない」のであるならば、「単純なる商品」ばかりでなく「抽象的なる商品」も同じく「動力を捨象されたものにすぎない」ものでなければならぬ。そもそも「資本家的関係からも、貨幣形態自身からも抽象されたものにすぎない」「抽象的なる商品」そのものが、それ自身において「資本家的商品への発展の動因を有するもの」だなどということが、言葉としてだけでも、いったい、どうして云えるであろうか？

②「**勿論、斯かる抽象的形態の商品は、その背後に資本家的生産関係を有するものであって、此の商品自身に資本家的生産関係を認め得るものでもなければ、更に貨幣形態さえもそれ自身には与えられて居ないものとなって来るのであって、所謂単純なる商品、或いは又更に進んで物々交換に於ける生産物の如く交換によって始めて商品となり、而も交換されると己に商品ではなくなるというような瞬間的商品にさえ類似したものとも云える。**」――この文章から最後の④にいたるまでの文章全体はまさに「画竜点睛」というべきところであって、われわれの深甚の注意を集中すべきところである。もちろん、それは例によって例のごとき論理的ならびに国語的詐術の手法によって成った一幅の「妄想的戯画の勘どころ」というわけではあるが。

まず、「その背後に資本家的生産関係を有するもの」という言葉に注目されたい。われわれがとり上げるのは他の社会の商品ではなくて資本主義社会の商品であること、したがって、この資本家的商品の背後に資本家的生産関係が横わっていること、――これらのことは、もちろん自明である。だが、この「資本家的商品」から「資本家的関係を抽象し、貨幣形態自身をも抽象したもの」として「抽象的なる商品」が問題とされるばあいに、この「抽象的なる商品」そのものが「その背後に資本家的生産関係を有するもの」だなどと主張するのは、まったく「抽象」のなんたるかをわきまえない詭弁であって、もちろん、純然たるタワ言にすぎない。さらに、この「抽象的なる商品」という言葉につい

て、われわれが眼で見ることのできるただの物として商品を念頭において、この物＝商品自身――諸君、よく聞きたまえ、この自身というところがミソなのである――のどこを探しても資本家的生産関係など見当らないし、また貨幣形態さえもどこにも見付けることはできないではないか、とこの論者は説くのである。このような説明も、もちろん、純然たる詭弁であり、タワ言である。ところで、この論者は、この純然たる詭弁をさらに拡大して、「抽象的なる商品」と「単純なる商品」とは「類似したもの」だという、世にも珍奇な『結論』をまんまと抽き出してくるのである。「この商品自身」は、ごらんのとおり、商品体そのものであってこの物そのものとしては「単純なる商品」とも「瞬間的商品」ともほとんどまったく区別がないではないか、これらをまったく「類似したもの」だというのは、あたりまえのことではないか、と。ところで、この「類似したもの」という言葉そのものがここで採り入れられているについて、もちろん、論者の細かい狡智を見逃すことはできない。「類似したもの」は、あくまで「きわめてよく似たもの」であって、けっして「ぴたりと同じもの」ではないということである。つまり、完全にすべての点が一致するのではなくて、当面問題となっている点で同じ性質をもっているが、他の点でちがっているということである。では、いったい、「抽象的なる商品」にたいして「単純なる商品」および「瞬間的商品」は、どの点について、「同じ性質」をもつものだと、この論者はいうのか？　この論者は、同じ著書の三五ページにおいて、「**勿論、商品としての形態のみを採って観察する場合には、その背後に展開されている此等の資本家的社会の実際の事情は、全て捨象せられて、如何なる商品にも之を認めることは出来ない。それは只価値と使用価値とをその二要因とするに過ぎない。**」（ゴシック体および傍点―山本）と述べている。もし「同じ性質」をばさきに例解したようにたんなる「物」という点にではなくて、ここに明記されたように、「価値と使用価値とをその二要因とするに過ぎないものとするならば、右の

「単純なる商品」および「瞬間的商品」[13]は、この同じ「性質」をもつものかもたないものかをはっきりと説明すべきである。そして、「同じ性質」をもつならば、まさに「商品としての形態のみを採って観察する場合には」、すなわち「単純なる・抽象的なる商品」としては、まさに「同じ規定」をもつものである、と云うべきである。このばあい、「類似したもの」などという言葉は、この論者が形態規定について全く無知であることはさることながら、論理的な規定そのものについてすらまったく盲目であることを示すものであり、しかも、「同じ規定」をもつものとして規定することをなんとかして回避しようという本来的意図のみが前面におし出されていて、まことに見苦しいものといわなければならない。

（13）「交換されると己に商品ではなくなるというような瞬間的商品」という言葉ほどこの論者の俗物的論法をみごとに示しているものはない。いったい、交換が終えたのちにも、なおかつ商品であるような商品が資本主義社会にひとつとしてあるだろうか？　商品は「価値および使用価値をその二要因とする」という、この論者自身の言葉について、この論者は、なんのために「使用価値」という文字を配したのか？　それが「使用価値」をもつものでなければならぬということは、交換そのものがすでにそれを「使用価値」として実現する他人の手への移転にほかならず、したがって交換ののちには当然に「使用価値」として実現され、消費されざるをえないということを示すものにほかならないということは、明白ではないか。それとも、この論者は、それを「使用価値」として実現する他人の手への移転が、二回以上の交換をふくむものだけについて、その一回の交換ごとに「交換されても依然として商品である」などと、云いたいのであろうか？

③「したがって又『資本論』第一巻の最初の最も簡単なる商品は、資本家的社会の無数の商品から一箇の商品を採って来たものとして、同時に又商品の歴史の発生期に見られるものと共通な点を有するものとならざるを得ない。」――この「したがって又」という、この論者に特有の煙幕的接頭辞に注意されたい。前の文章では、資本主義社会の「抽象的なる商品」は、「物」それ自身としては、「単純なる商品」や「瞬間的商品」にさえも「類似したものとも云える」

と述べられてあった。つまり、「類似したものとも云える」ということは、通常の国語的意義からすれば、必ずしも「類似したものだとも云えない」ということをふくむ。ところが、こうしたアイマイな「類似したものとも云える」というような言葉を前文にかかげておいて、ほかならぬこの言葉そのものにもとづいて「したがって又、共通の点を有するものとならざるを得ない」などという『結論づけ』を与えることは、まったく当を得ていない。「類似したものとも云えるから、したがって共通な点を有するものとならざるをえない」などという『論理構成』が、はたして通常の論理的並びに国語的理解力をもっているほどの者に許されるであろうか？　しかも、この論者は、まことに老獪にも、最後まで、この「共通の点」とはなにかということを明示することを――意識的に――あえてしないのである。さきに引用した「それはただ価値と使用価値とをその二要因とするにすぎない」というこの論者自身の「抽象的なる商品」にかんする定義を、なぜここに適用しようとしないのか？　右の定義の内容とは別に「共通な点」、「類似した点」があるならば、これを明確に指摘すべきである。(14) この論者は、そのそもそものはじめからして、資本主義社会の「抽象的なる商品」がいかに「単純なる商品」と本質的にちがっているか、またちがうものでなければならないかということを、ありとあらゆる論理的ならびに国語的錯乱と濫用、自家撞着とタワ言の連続によって、なんとか『論証』せんものとして、そのためにのみ文章を綴ってきたものである。ところが、延々二三ページを費やしてそのあげくのはてに、「抽象的なる商品」と「単純なる商品」とは「類似したものと云える」という突然の断定が飛び出して来て、しかも、「それだから」両者は「共通な点を有するものとならざるを得ない」――諸君、よく聞きたまえ、これはひとりでに「とならざるを得ない」のだそうである！　――という再度の『確認』をもって――しかも、その「類似」点についても「共通の点について」もこれっぱかしも示すことなく――幕切れになってしまうのである。

なんと、あきれはてた文章排列屋ではあるまいか。このような論者が、はたして、理論などを云々する資格があるであろうか。いや、理論どころか、たんなる論理すら、云々すること自身、まことにおかしいしだいだ、というべきではないか。この③の冒頭で、この論者は、「第一巻の最初の最も簡単なる商品」という言葉を自分で用いている。にもかかわらず、この論者は、それは「抽象的なる商品」であって、「単純なる商品」ではない、と主張しているのである。いったい、「簡単なる」と「単純なる」とは、論理的にみて、どこがどうちがうというのか？

（14）ここで両者の「類似した点」「共通の点」を明示しえないことは、さきに行って――次稿であきらかにされるように――両者の根本的差異を例によって例のごとき論理的詐術を用いて『論証』しようと努めているという事実と照してみるとき、まことに意味深長なものがある。要するに、この論者にあっては、言葉はその場その場でその意味を自在に変えてしかるべきものであり、自家撞着そのものもむしろ必要な一『論証』方法なのである。

④「それは所謂単純なる商品の性質をも始めて明確にし得る抽象的規定を有するものではあるが、決してそれ自身斯かる単純なる商品としてあるのではない。」――「この最後の文章も、この論者の論理的錯乱と同時にその独自の狡智をば的確に示すものとなっている。まず、「決してそれ自身斯かる単純なる商品としてあるのではない」という言葉に注目されたい。ここでの主語は、もちろん、資本主義社会の「抽象的なる商品」である。では、「単純なる商品」は、といえば、これは資本主義以前の「商品」である。とすれば、資本主義の「抽象的なる商品」がそれ自身――諸君、よく聞きたまえ、この「それ自身」という文句の、なんと『論理的に厳密なるひびき』をもっていることか！――資本主義以前の「単純なる商品」としてあるのではない、ということぐらい、わかりきったことはない。これは、ちょうど「人間の手」と「猿の手」とを比較して、どこがちがうかということをあれこれわけわからずに論じたてたあげくのはてに、「人間の手」と「猿の手」とは、「類似したものと云える」、「共通な点を有するものとなら

ざるをえない」との断定を下しておいて、そのつぎに得意然として、「人間の手」は「けっしてそれ自身かかる猿の手としてあるのではない」との『結論』を下すのと、まったく同じたぐいのものである。それは、要するに、はじめにかかげた前提を最後の結論にもらってきたまでで論理的錯乱はまさにここにおいて極まれり、というところである。なお、蛇足ながら、ここでの「抽象的規定」という言葉も、まことに特徴的なものである。御本尊が「抽象的なる商品」であるから、それがもっている「規定」はなんでもすべて「抽象的」という性質をもたなければならないなどと考えるのは、論理的思考能力に欠けた俗物にこの上もなくふさわしいものである。いったい、どういう規定が「抽象的規定」であって、それとは別のどういう規定が「非抽象的」規定――「具体的」規定――だというのか！

さて、以上詳細に検討したところによって、「抽象的なる商品」と「単純なる商品」との『区別づけ』に関するこの論者の所論の内容が、実際においてどのようなものであるかということは、いまや疑う余地なく明らかなものとなった。その主張しているところが、たんに両者の『区別づけ』の『論証』に失敗している、というだけではない。それにもまして、決定的に明確にされたのは、この論者の並べたてるいっさいの文章が、ひとつの例外もなしに、論理的ならびに国語的濫用と錯乱およびペテンを示すものであり、また、この錯乱と濫用の上にのみはじめて成り立つことができるようなものばかりだ、という事実である。これは、この論者の所論を貫ぬく根本的特徴であり、またその全部でもある。つぎに、これらの全錯乱と濫用の中にふくまれ、これと固く結びついた別種の特徴を挙げれば、まず、第一に、この論者が「商品形態自身が資本主義の基本的社会関係となってあらわれる」という、まったく顚倒した妄想をその根本信念としているということである。第二には、「抽象的」「具体的」「歴史的」あるいは「形態」「規

定」等々といった基本的な論理的概念について、まったくでたらめの、しかも相互に矛盾したばらばらの解釈と用法を――御都合しだいで――勝手にふりまわしているということである。そして、これと結びついて、第三の特徴が、つまり、この論者がヘーゲル論理学およびマルクス『資本論』についてなにひとつ正しい理解をもってもいないのに、ヘーゲルおよびマルクスに特有な、――したがってまた俗物どもにはなんとも手に負えない――概念規定をただ言葉の上でだけさかんに引用して、これによって、他人をも自分をもまんまとあざむきとおしているという、まことに目覚ましい事実が指摘されるのである。論理的ならびに国語的錯乱と濫用、それに加えて無数の自家撞着とヘーゲルかぶれの「乾葡萄の糞ひり」とをもって、いったい、どういうことが、論理一貫的に示されるというのか？　そもそも、論理一貫的に文章を構成することなしに、どこに理論など云々するところがあろうか。そしてついでながら第四の特徴としてあげられるのは、現実の歴史的発展過程、とくに資本主義社会の生成、発展の過程についての歪曲と改ざんである。この論者の所論について、たとえば、「宇野理論」というような言葉をつかうこと自体、国語の濫用である。（もっとも、この場合の『理論』とは、「論理的ならびに国語的錯乱と濫用、自家撞着とペテン」の異名としてのみ用いられたものと理解すれば、別問題であるが。）いわんや、その所論をもって「理論体系」などと呼ぶことは、当の御本人自身、「理論体系」はおろか、「論理的体系」とはどういうことかについてなにひとつわかっていないということを告白しているようなものである。

この論者のこのような所論について、従来から真面目な経済学研究者によって批判が呈せられたことは、[15]もとより当然のことであり、またこれらの批判のほとんどすべてが、この論者の特異な所論がいかにマルクスの確立した経済理論体系とちがっているかという点の追究にその主眼をおかれていたことも、争われない事実であった。ところが、

これらの批判にたいしてこの論者の反批判の主眼のひとつにおかれていたのは、「マルクスと自分とのちがいをいくら指摘し強調されても自分は納得しない。自分の所論そのものについてどこが、どうまちがっているかを指摘してもらいたいものだ」という主張であった。「自分の所論そのものについて批判せよ」――まことに、よきかな、この一言！

この論者は、世間的には「マルクス経済学者」という名で呼ばれている事実が示すように、その所論のほとんどすべてをマルクスの所論に負っており、その論ずるさいの材料のほとんど全部がマルクスの引用である。だが、いくら、マルクスを材料として、マルクスの言葉をもっていかにその所論をみたして見たところで、その論者が「マルクス経済学者」であるとはいえぬ。それは、原子物理学の論文や著書をいくら印刷発行しても、その書店主は原子物理学者となりえないのと全く同様である。「マルクス経済学者」であるためには、なによりもまず、マルクスの方法論を自分のものとし、マルクスのつくり上げた資本主義社会の全「見取図」を、論理一貫的に、理論として、正しく把握していなければならぬ。われわれは、この「見取図」を、たとえば、人体の解剖図にたとえることができよう。マルクスは、人体の全構造を正しく分析して、その「細胞形態」を明かにし、ついで、身体の各器官がいかなる細胞からいかに成り立っているか、それらの各器官がいかなる機能をもち、全体の中でいかなる位置を占めているか、各器官と器官、各部分と部分とがいかに結びつき、関係しあい、全体として人体を形成し、しかも、全体として生きた人間を構成しているかを、一幅の解剖図で示したものということができる。ただ、この解剖図においては、これを形づくっている線や形はすべて抽象的な「論理的文章」をもって描かれており、したがって、論理的素養のない者には、この線や形の意味は、とうていつかむことができないのである。ところで、ここにある論者が出て来て、そのマルクスの

描いた見事な解剖図の上にすきとおった白紙を置いて、これをすっかり写しとることによって、自分でも一個の解剖図を書き上げたということを主張しようとこころみたと考えていただきたい。ところで、この論者は、身体の各部分がどうなっているか、それらの相互関係はどうなっているか、そもそもそれは全体としてどういう構造になっているかもわからず、いわんや各部分がどうしてそういう形をとっているのかということもさっぱりわからない。そこで、足の部分については、膝から下だけひき写してしかも足の指は、一方は四本、他方は六本にする。膝と胴の間はなにもなく、心臓の代りに胃袋を二つ並べる。首はなく、頭と胴体とはばらばら、眼は一つで耳はない、といった写し取りができあがることになる。ところで、この写し絵を人に見せるときに、このなぞり屋は、きまってその白紙の下にマルクスの解剖図を敷いておくことを忘れない。このなぞった絵を見る者も、えてして、その二枚の紙を重ねて、一緒に眺める。そのときには、膝から上の部分や、首の部分は、なぞって写した絵の方にはなくとも、下に敷いた原図がすいて見えるために、不用意な読者はその部分もみなちゃんと出来上っていると思いこむ。のみならず、原図の指が五本になったり、心臓があるのは、かえって誤りであって、指が四本と六本である方がはるかに「論理的に厳密」であり、心臓のない方がはるかに「純粋な」人体であって、そうでない原図はその点で甚しい誤解を犯しているのだ、とさえ信じこむ。そこへ、原図の正しい意味を真面目に読みとろうとする研究者が来て、そのひきうつした図がいかに原図とちがうか、いかにそれを歪めているかを指摘してこれを批判すると、このひき写し屋は開きなおって云うのである、――「君、原図とちがっているからといって僕が書いた図そのものがまちがっているということにならない。僕の図そのもののまちがいを云いたまえ」と。そうだ、こういう引き写し屋のなぞった絵は、御本人の云うとおり、その原図を下におくことなく、これから遠慮なく引きはがして、ただそれだけを白日の下でとっくりと見るにか

ぎる。さすれば、そこにはっきりと出ているのは、人体どころか、文字どおりバラバラの、生命のない、まったくでたら目の線と形の寄せあつめでしかない、ということがよくわかる。こういう、引き写し絵がなんの役にも立たないこと、それは、原図の正しい理解を歪めるばかりだということもまた自ら明らかとなる。科学的な原図を論理一貫的に正しく把握することによってはじめていかに正しく生きるべきかを理解しかつ実践することを第一の主眼とすべき「マルクス主義者」の中の少なからざるものがこの原図の正しい意味を汲みとろうと努力しないばかりか、右のようなでたら目の引き写し図をふりまわしてかえって原図を訂正し批判したりして得々としているという、今日のわが国の実状は、まことに教訓的である。ここに端的に示されているのは、ほかでもない、マルクスの方法を正しく習得することをしないで右の原図全体を論理一貫的に把握することはまったく不可能であるという動かしがたい法則的事実と、さきに――本誌前々号所載の拙稿「賃銀論はいかにあるべきか？」の結びにおいて――指摘された「理論の軽視、理論的無関心」の盛行という歴史的事実である。

(15) そのうちのすぐれた例として、大木啓次氏の論文「経済学の理論体系における若干の問題について――宇野弘蔵教授の所謂「原理論」について教授に御教示を請う――」（東北大学経済学部研究機関誌『経済学』第四四巻、昭和三二年九月所載）を挙げることができる。この論稿はいわゆる『宇野理論』なるものの『理論的中核』について鋭くつつこんだ論究をこころみたもので――その「師教を仰ぐ」ていの東洋的謙虚さにあふれた文体にもかかわらず――まことに読みごたえのある力作であり、その続篇の発表を大いに期待されたものであるが――右の論者をとりまいてひしめきあっている有象無象の「亜流」および孫亜流たちからなにひとつ「反批判」が出されることもなく――ついに今日にいたるまでその続篇の発表はさしひかえられているようである。

（一九六一・一一・二二）